スーパーロボット大戦ＡＢｓ・ＯＧサーガ

ＴＡＫＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパーロボット大戦ＡＢｓ・ＯＧサーガ

【Ｎコード】
Ｎ９５３７Ｖ

【作者名】
ＴＡＫＥ

【あらすじ】
■スーパーロボット大戦ＡＢｓ・ＯＧサーガ■
正式な読み方「スーパーロボット大戦アンブレイカーズ・ＯＧサーガ」
この物語はスーパーロボット大戦ＯＧシリーズに準拠しています。
参戦作品
ＯＧ、魔装機神、ＳＲＷ・ＥＸ、オリジナル

■この物語の開始される時系列■

ＯＧ１終了以降（新西暦１８７年～）

■補足■

魔装機神の時間系列でいうと１部以降で２部開始前

章の切り替えにて登場人物を紹介していきますが、あくまで出演する人物のみの紹介となります。

登場する兵器の紹介は、物語の都合上各章の最後に紹介させていただきます。

■２０１１年０８月■

現在第二次ＳＲＷ・ＯＧの発売を待っている状態です。そのため製作側指針としてＯＧ２外伝までの設定と展開に準拠していきます。

第二次ＯＧ発売により、小説内の物語と第二次ＯＧの物語が矛盾する場合はどうかご容赦のほどおねがいいたします。

#0__この章のはじめに（前書き）

この章の登場人物

#0_この章のはじめに

ジジ・フラグ
地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。
ラ・ギアス側の召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。
＞i２９９６７－３８５１＜

ガワン・カーワン
サザ公国の建国功臣の末裔。元親衛騎士団長だったがその職を辞している。
今はラン・アーヴィンの従者となっている。

ルルル・アーヴィン
サザ公国第一王女。王府のプロパガンダとして従軍している。

ラン・アーヴィン
サザ公国第四王女。整備兵として従軍している。

イネス・ドーナン
サザ公国の女性騎士。　ギルドラーＩＩに搭乗している。

呉業（ごぎょう）
火星・移民軍の総帥。　地球連邦政府による弾圧に対する報復として小惑星を地球に落下させる任務を帯びる。
ジジ・フラグの義父。

トトカ・アーヴィン
サザ公国の現国王。　サザ公国とバゴニア連邦の戦争に翻弄されている。

ルルルとランの父親でもある。

#1

今の光は何だ？
コックピットにまで光が届いたとき、砲弾がエンジンに直撃したのだと思った。
ミラージュ〔ゲシュペンストｍｋ４〕そのものが爆発し、自分は蒸発した。
・・・・・どうやら違うようだ。
スロットルを握る手とフットペダルを踏む足は、力強いエンジンの鼓動を感じている。
生きているのだ。
そうやって自覚すれば、指先がコンソロールを滑り、機体情報をモニターに示させる。

地球上空５００メートルを飛行中・・・
現在位置・・・
〔ＡＮＫＮＯＷＮ〕
地球衛星軌道上の通信衛星全てが破壊されたとでもいうのだろうか。
「ジャミングの散布は？」
〔否定〕機体のＡＩは短く回答する。
〔索敵範囲内に機影７・交戦中〕
ＡＩが新たな情報を表示し、サブカメラが自動望遠で状況を捉える。
〔マーカー＞識別＜無し・未確認機体と推定〕
「肯定だ」
鈍重な甲虫の様な機体を青い羽虫の様な機体が包囲している。
甲虫のような機体は装甲で剣撃をいなしながら羽虫の一機に張り付いている。
一見して無謀に見えるが、背後と側面に対する防御は即応し、分厚い装甲で受けることで機体への致命傷は避けている。

羽虫の部隊は、持久戦に持ち込んで被害を抑えているようだった。
「間違いではないのだがな・・・・・」
兵を大事にし過ぎている。
手堅いが凡庸な指揮官かもしれない。
　その時、青い羽虫のような機体が２機こちらを向いた。
ほんの僅かな動きだった。
　熟考できない。
直感だった。
　退く。
地域情報は皆無だが、まず戦闘領域から撤退。
発砲を受ければ、斃す。
〔距離８００（メートル）〕
ＡＩが告げる。
（・・・・来る）
闘気のようなものが向けられた。
分厚い装甲と空間の隔たりがあったが、確かに感じた。
「青い未確認機を敵性機体と認識」
即決だった。
〔了解〕
ＡＩが短く答える。
　ミラージュの握るビームサーベルから、弾ける光の奔流が奔り出す。
コックピットに低く唸るようなエンジン音が響く。
ミラージュが巡航出力から戦闘出力へと切り替わったのだ。

「モーションセレクト・ＺＩＧＺＡＧ（急加速・急制動）」
〔ｓｅｔ－ｓｔａｒｔ〕
ミラージュのテスラドライブが唸りを上げ、青い羽虫との距離を一気に詰める。
機体が音速を超える。

青い羽虫は剣を突き出したまま滑空し、突進する。
　スロットルのトリガーを引く。
ミラージュは加速をやめ、青い羽虫の前で文字通り静止し、僅かに右に身を滑らせた。
構えただけのビームサーベルから極太の熱気が奔り、青い羽虫の腰を両断する。
2機目の背後に回りこんだ動作が斬撃そのもので、腰から両断されていた。
「損害報告」
〔皆無〕
「掃討するぞ！」
ミラージュが甲虫のような機体を囲む戦闘の輪に突進する。
　あとは一方的な殺戮だった。
3機目は速力を活かした袈裟懸けで真っ二つに割られ。
4機目と5機目は大地を滑るように回転した斬撃で腰を両断された。
6機目は正面から斬り合おうと剣を振り下ろしたが、そこに刀身は無かった。ビームサーベルが再起動し、両腕は払い落とされ、胸から右肩まで斬り上げられた。
7機目は斬撃を受けたものの、高出力のビームサーベルが剣ごと機体を両断した。
「状況終了」
〔損害無し〕
ＡＩが告げる。
機体にこそダメージは無いが、慣性を無視した機動をすれば体が悲鳴を上げていた。

甲虫のような機体がこちらに腕を向けていた。
（何なのか？）そう思った時にはペダルを踏み込んでいた。
同時に砲音が轟く。

砲弾ははるか後方に着弾し、土煙を上げた。
「殺すわけにもいかない・・・・・か」
単純に恩の押し売りはできないものだ。
〔距離３００〕
ＡＩが告げる。
咄嗟に踏み込んだだけだが、ここまで距離が開くか。
「便利さに慣れ切れないものだ」
「サーベル出力をトリガーに回せ」
〔移譲・・・・完了〕
「いくぞ」
ペダルを踏み込む。

ミラージュが音速で甲虫のような機体の右横を通り過ぎる。
甲虫の右腕が肘から脱落する。
背後から背中を蹴り倒す。
まず、左腕を肩から斬り、両足の腿から下を切払った。
『抵抗するな、殺すつもりはない』
ミラージュの外部スピーカーを使った。
『信じられない事だが、偶然戦闘に参加してしまった』
〔翻訳用意できました〕
ＡＩが告げる。
『危害を加えるつもりは無い。機体から出てくれないか』

甲虫の背中のハッチが開き、中から一人の少女が現れた。
淡い栗色の髪の少女だった。
「剣を向けながら、危害を加えないとはどのようなことか」
よく通る声だった。
『状況を掴めないまま、戦闘に参加した。劣勢な方に味方をすれば、話くらいはできると思った』

「無礼な」
『そう思う。俺は名乗ってもいなかった』
「ハッチオープン」
〔・・・・了解〕
ＡＩが逡巡したように告げた。
ミラージュが跪き、ハッチが開く。
差し出された手に乗って、ハッチのある背中に飛び移った。
思ったとおり、淡い栗色の髪だ。

「ジジ・フラグ、所属は無い」
「私はルルル・アーヴィン、サザ公国の王女である」
やはりよく通る声だと思った。
右手に握った携帯モジュールを見た。
〔サザ公国という国家、団体は確認できません〕
この携帯モジュールはミラージュのＡＩと繋がっているため、自動検索された情報が即時に送られてくる。
この世には無い国・・・・か。
「ジジ・フラグよ、所属が無いとはどのような事か」
「主人を持たないだけだ」
「主人を持たなくても、故郷はあるだろう」
「それも無い。　ただの男という以外名乗りようが無い」
「私を女だと思って、愚弄しているな」
ルルルの目に強い光が灯る。
同時に心を閉ざそうとしているのだ、と感じた。
「俺の身の上を知ってどうする？　俺はここがどこか知りたいだけだ」
「地上人のふりをして！」
「地上人とはどういうことだ。　ここは地球ではないのか」
「芝居はもうよい・・・・バゴニアも悪辣な手を打つものだ」

ルルルが腰から短刀を抜く。
「私はバゴニアに利用される気は無いっ！」
ルルルが短刀を自分の喉元に突きつける。
　ミラージュが機体を揺さぶる。
揺れる足元に構わず、ルルルに向かって走る。
バランスを崩すルルの手を短剣の柄ごと右手で握る。
ハッとしたルルルが短剣を喉に刺そうとするが、短剣がその場に固着したように動かない。
「ぐっ・・・」
ルルルの鳩尾に左拳を打ち込む。
絶息するルルルと視線が合う。
燃えるような瞳が力を増し、かき消える様に光が失せた。
「地上人・・・・・か」
空を見た。
太陽はある。
地底では無いはずだ。
ルルルの言った「地上人」をかみ締めるように呟いた。
「ここは・・・・・どこだというのだ」

#2

呻き声を漏らしてルルルが覚醒した。
「起きたか」
ジジが言う。
目の前の携帯用のガスコンロの上のポットがぐつぐつと音を立てている。
夜気は冷たく火の傍は暖かかった。
「お前はジジ・フラグ」
ルルルが立ち上がって身構える。
ジジは立たなかった。
「短気は起こすな、拘束をしなかったことを俺の誠意と思って欲しい」
ジジはガスコンロの火を見つめている。
「・・・・・」
「短刀も手元にあるだろう」
「・・・・なぜ？」
ルルルは用心深く視線を逸らさず腰の短剣を握る。
「大事なものだろう」
「・・・・・」
「年季の入った剣だが、よく手入れされている。　誰かに譲られたものなんだろ」
「そうだ」
「奪っていい物じゃないと思っただけだ」
「危ないとは・・・・・思わなかったのか」
「思わないね。　お前に俺は殺せないし、俺はお前に死ぬことを許さない。　自分で生きることも死ぬこともできない人間を恐れることはないな」
ルルルが肩を震わせる。

わななく震えは全身に及んだ。
震えを収め、ルルルが俯く。
「命一つ、いや二つ貸したとでも言いたいのか」
「そうだ。　貸し借りできないものを「貸した」この事は分かるな」
ルルルは俯いたままだ。
「この世界の情報を教えてくれ。ここは地球じゃないんだろ」
「・・・・・」
「俺の世界では太陽は東から昇り、西へ沈むのだ。それがこの世界で太陽はいつまでも中天にある。夜に近付くにつれて太陽は消え、月が現れたんだ。・・・・・ここは地球じゃない」
「・・・・・本当に地上人のようだな」
「ああ」
「教えよう、その代わり貸しは一つ返したぞ」
「貸し借りなんて例え話だろうに」
命の貸し借りなど出来る話ではないのだ。
今の彼女をわかりやすく言っただけだった。
「私にも誇りはある」
自虐的な響きがあった。
黒く澄んだ瞳を長いまつ毛が隠す。
「まあ、飲め」
ルルルに金属製のカップを渡す。
「白湯？」
「生水を飲みたくないだけだ」

　ルルルにこの世界の概要を簡単に説明してもらった。
この世界は地球内部に存在するラ・ギアスというものだった。
ラ・ギアスそのものが人工物に近く、この世界の住人に対しての先史文明がこの世界を作ったのだ。

言われてみるとその通りで、円筒状のスペースコロニー同様地平線の角度が逆に存在している。
なぜ俺がこの国に召喚されたのかを聞けば、何者かの召喚魔術か地球とラ・ギアスを繋ぐゲートに触れたかのどちらかと言った。
ルルルは恥ながらも、心中助けを願ったが自分は高等魔術を習得していないので召喚は無理だったと言った。
ただし俺がこの異世界に召喚されたかもしれない事実を鑑みれば、魔法という技術がペテンではなく事実として存在しているのだと実感した。
　そしてこの土地はエオルド大陸の西端に位置するサザ公国といわれる国だった。
隣国のバゴニア連邦とは休戦中であったが、偵察に侵入した部隊と交戦し、俺はそれに巻き込まれたということだった。

　大方内容が飲み込めた。
ジジはマグカップの中身を煽った。
温くなった白湯が喉を潤した。
「これからどうするつもりだ」
ルルルが言う。
「お前を父親に届ける」
「それは不味い。　私を撃墜したお前を陛下は許さないと思う」
「いいさ。　理由も無く野垂れ死ぬよりは、いくぶんかマシだ」
「・・・・本気で言っているのか？　私は助けられたことを恩義に感じている。　だから便宜だって図るつもりなのだ。　リーン市に私を届ければいいだけだ。　無闇に王城へ行き、陛下に会わない方がよい」
「お前なあ、俺が居なければ、王様に要領を得ない事を答えなければならないんだぞ。　『窮地を地上人が唐突に召還され、助けられた』とな。　その場に俺が居なければお前が困る

だけだ」
「陛下が私を信じない。　と言うのか」
「お前は軍というものをまるで分かっていない。　部下と機兵を失っておいて、理由がはっきりしないなど許されることではない。サザ公国の軍法は知らないが、厳罰が待っているだろう」
「・・・・・」
　ルルルの顔が青くなり、視線が宙を泳いでいる。
　彼女は口調や態度こそ尊大だが、軍歴はまだ浅いようだった。
芯の強さこそ感じるが、人間味に重厚さが無い。
もしかすれば彼女は、自分が思った以上に少女なのかもしれない。
「歳はいくつだ」
「１５」
・・・・・じゅうご。
口の中で噛み締めるように呟いた。
　若すぎる。
可憐な少女が軍に所属している、というだけで心の中にある深い傷をえぐられた様な気持ちになる。
そう思えば、ルルルの簡潔な軍人らしい喋り方がより一層心を暗澹とさせた。
「軍歴はいくつからだ」
「１２、女が軍人をやってはいけないか」
「侮っているのではない。　ただの感傷だ」
「感傷とは無縁な、鉄で出来たような顔をしているのに」
　鉄で出来たような顔。
言われてみればそうだった。
「確かに、優男ではないな」
「言い過ぎただろうか」
「ふ・・・言い得ている、癪だがな」
ポケットの中の携帯モジュールを操作し、ミラージュを待機出力から巡航出力に上昇させる。

夜陰に溶け込んでいた機体が振動と共に目覚める。
コクピットハッチが開き、自動で乗降姿勢になった。
「行くか」
「そうか・・・・行こう。　私はこの僅かの間にそなたと分かり合えたような気がする。　なにが、とは言い表せないのだが」
「明日には消えているような男だ。　心に残すまでも無い」
「不遜な言い方だ。　首を捻じ切ってやりたいほどに」
ルルルの言う鉄の様な顔で微笑んでみた。
顔の筋肉が軋む。
彼女の言うとおり鉄の様な顔なのだ。
ルルルも微笑む。
憂いと悲しみを湛えた表情だった。
言葉には出さないが、その目は「死ぬな」と訴えている。
首を振った。
「ここから先は命一つだ。　命は大事に仕舞っておくものじゃない。時には無造作に使ってみるものだ」
微笑むことが出来た。
本当に思っていることを言えたのだ。
「一つ聞きたい」
「何だ？」
「地上人は皆、そなたのような大馬鹿者なのか」
「そうだったら単純なんだがなあ・・・・」

#3

ジジはリーン市に到着すると、ミラージュの掌にルルルを載せたまま大通り沿いを飛行させた。
王城は機兵によって埋め尽くされていた。
ルルルが言うには、その機体はルジャノール改とよばれるものだった。
ルルルが事前に破壊されたゴリアテの通信機で王城へ通信していたのだが、警備は物々しい緊張感を持っていた。
城門に到着すると、まずミラージュの掌からルルルを下ろし、自分も降りた。
戦闘の意思が無い事を告げ、兵士が両脇に立つ。
ルルルは軍の高官らしき男と会話している。
案内役を受けた官吏は困惑した表情だった。
ルルルの口添えのおかげで狼藉者なのか功労者なのかまるで分からなくなったからだ。
その後は拘束されずに控えの間まで案内され、王に下問を受ける流れとなった。

玉座の間に通されるとそこには国王を始めとし、大臣や高官が集まっていた。
何より長銃を手にした衛兵がざっと５０人近く配備されていた。
「そのほうがジジ・フラグであるか」
控えの間で、宰相が質問をすると聞いたが、質問というより尋問に近かった。
「御意」
「地上の人だというが真か？」
宰相が言う
「重ねて御意」

ジジは平伏せず立ったまま喋る。
両脇で監視する兵士が咎めるのだが無視した。
「証拠を示せ」
「俺の出自を立てる証拠は何も無い。　俺はお前たちのいう地上人だからな」
「お主の所持品から吟味し、判断を下して構わないのだな？」
「そうすればいい」
「次に、お主はルルル様と交戦したと報告を受けている。　結果的に姫様を救出している事となるが、反抗された場合はどうするつもりであった」
「殺しただろう」
「殺意を否定しないのか」
「俺と彼女では力量に差が有りすぎた。　だからこそ屈服させる事ができたという結果に過ぎない」
質問を続けようとする宰相を国王が制止する。
玉座に座った男は４０代くらいの歳に見えた。
「余がサザ公国王トトカ・アーヴィンである。　まずはその方にわが娘を救ってもらった事の例は述べねばなるまい」
「この者は、バゴニアの送り込んだ間者かもしれませぬ。　姫様を救った事も、陛下に近付くための芝居かと存じ上げます」
大臣の一人が言う。
「なにより出来すぎた」
他の一人が言った。
「余の家臣は余所者が嫌いのようだ。　もしも余が処断すると言えばどうする」
「闘えるだけ闘うまでです」
自然と笑みがこぼれる。
周りを見渡すと長銃が胸と額に照準されている。
向けられる殺意が血を熱く沸かせた。
弾は当たるだろうが、急所さえ逸らせれば、息絶えるまで闘う事が

できる。
「無駄死にではないのか」
トトカが手で銃を下ろさせるように制する、
「男とは最後まで闘うものです」
群臣が色めき立つ。
「はっきり言うではないかジジ・フラグとやら。　その方・・・・死に場所を探しているな」
トトカが目を細めながら言う。
眼光が憐れみを帯びていた。
胸の奥にある想いそのものを言われた。
はっきりとそう思える。
「わざわざ余を怒らせるように言っている。　そもそも余を試すなど、万死に値するのだがな」
「容易くは死ねないでしょう。　斃した者達を背負っているのですから」
「何人だ」
「斃した者たちは、数限りなく」
「誰を斃した」
「戦で義父を、同じ戦で戦友を」
「そうか、父を殺したか」
「2日も経っていないことです」
「余にも分かるように言うのだ」
「俺がラ・ギアスに召還される前、自機の時計で35時間前の事になる。　俺の義父が地球圏に叛乱を起こした戦争の最終局面だった」
「最終局面？　ただの兵士であるお前がそこまで読めるのか」
「この戦争は叛乱軍の勝利になっていたと思う。　俺が防衛戦に参戦した頃には、地球に小惑星が落ちているところだった」
一人が「狂言だ」と言った。
その男を無視して話を続ける。
「義父は強かった。　寡兵ながらも武装化した小惑星に拠って戦っ

ていた。防衛線を抜いた後の戦いが苛烈そのものだった。　緩やかに落下する小惑星に連合軍艦隊が追いすがるのだが、反乱軍の部隊が、いくつかその場に留まって足止めをした。　誰も生き残っていないと思う」
「叛乱軍は生還する事を捨てた軍だったのか」
　頷く。
トトカが首を振る。
「俺の参戦は出遅れてしまってな。　地球に落ちる小惑星を止められない、そんな時だった」
「その方は・・・・・戦に勝つことではなく、ただ義父を斃す事だけを望んでいたな」
「義父は呉不敗とまで呼ばれる男だ。　英雄の中の英雄、その男を超える。　あの瞬間しか無かったと思う」
「地球を救おうと思わなかったのか？」
「まるで無い」
「・・・・・」
「義父直属の部隊と戦闘となりまず最初に義父を斃した。　ほとんど紙一重の戦いで、俺は不意打ちを食らって死んだと思った。　不意打ちを受けたと思ったのは、操縦席が光に満ちたからであって。　死ぬときはこんなものだと思ったよ。　ルルルと話して、その光はラ・ギアスが俺を召還した光だった知った」
「荒唐無稽な話だと思う。　そして誰も救われない話だった」
トトカは深く玉座に腰掛け、眉間をしごいている。
「戦争が誰かを救ったことがあるか」
「しかし・・・・聞いているだけで、何か圧倒するものが胸に刻み込まれるような闘いだった」
「戦しか知らない愚かな男たちが闘っただけだ。　そもそも俺の狂言かもしれんよ」
トトカが心底可笑しそうに笑う。
群臣達も釣られて笑うのが笑みが引きつっている。

「お前に・・・・・王女では敵わないわけだ」
頭を垂れていたルルが跪く。
後ろに控えていたルルルを避けるように人垣が割れる。
「王女からの報告を分析したのか？」
「7機のアゲイドを瞬く間に斃した。　お前は知らないだろうが、王女が交戦した時は精兵が7機で追撃していたのだ。　今思えば王女は誘い出されたのだな。　同数で圧倒されたのだから、敵は精兵中の精兵だろう」
「敵の錬度よりも今回の戦闘は指揮官のせいだ」
「ほう」
トトカの目が輝く。
「僅かの間しか接していないが、王女は人を惹き付ける人徳を持っている。　部下達は彼女の盾になって死んだのではないか」
「見ていなくても分かるのか」
「推測でしかない。軍は戦いに非情でなければいけないと思う。部下達が戦いもせず指揮官を守っているだけでは戦いにならない。
　指揮官が部下を殺したようなものだ」
「余もそう思う。　軍の部隊が王室親衛隊のような真似をしてしまった。　それがそもそもの間違いだったのだ」
トトカが玉座から立ち上がる。
衛兵以外の臣下の全てが跪く。
「皆！　余はジジ・フラグの言を信じ、罰は与えない事とする」
広い部屋に声が響き、群臣が返事を返す。
トトカが視線をルルルに送る。
「ルルルよ」
「はい」
「今を以て、そなたから部隊の指揮権を剥奪する。　余の機兵と兵を失った罪は軍法に照らせば死罪に当たる」
「・・・・はい、覚悟しています」
「分かっているのか」

「死を賜るつもりで帰還しました。　ですが、私はジジ・フラグに命を二つ借りています」
「命を借りただと」
「それを返さないことは恥だと思いました。　この借りた命をどうやれば購えるのか分かりません。　ジジ・フラグ
には格別の計らいをしていただきたい。　陛下お願い致します」
「ルルルよ、わが娘よ。　生き恥を晒せ、お前には死すら生温いのだ。　生きて６人の部下の死を背負え」
「背負います。　彼らは私が無能なために死んだのですから」
ルルルは跪いたまま顔を上げなかった。
僅かに嗚咽だけが聞えた。

#4

ジジはミラージュ〔ゲシュペンストmk4〕を返還してもらうために軍の整備ガレージにやってきた。
「あなた地上人でしょ？」
到着するなり、少女が駆け寄ってきた。
栗色の髪を三つ編みにした幼い少女だった。
「ジジ・フラグだ」
地上の流儀で敬礼した。
動作が体に染み付いているので、淀みなくすることが出来た。
「私はラン・アーヴィン」
ランの後ろに中年の男が付き従うように立っている。
男には左腕が肩から無かった。
「従者のガワン・カーワンです」
ガワンは目礼をするだけだった。
穏やかな眼光の中には、値踏みするような動きがあった。
「お前は変わった地上人ですね。　行き当たりでお姉さまを助けたと聞きました」
「運でしょう」
「運ではない」
ガワンが表情を変えずに言った。
「謙遜しなくて良い。　過ぎたことだが、戦況を分析した。　相手は手練7機だった。　それを一瞬で撃破する事を運とは言わない。　お前は優秀な戦士なのだろう。　今こうして相対し、この男ならやるのだろうと思った」
「ガワンは王国でも屈指の実力者なのです」
「何の実力者かは聞かない。　聞けば隙を見せることになるだろうし」
「？」

「姫様、ジジ・フラグは、与えられる情報を鵜呑みにしない。そう申しているのです」
「まあ、拗ねた考え方ですね。　それに人からの賞賛は素直に喜ぶものですよ、ジジ」
拗ねている。
確かにそうだと思った。
「子供の方がよく見える。　純粋な拗ね方ではないからな」
ガワンお前もだ。
ただ純粋な拗ね方などと言わず、可愛げがないと言えばいい。
言えば自分が本当に拗ねていると思った。
「ガワン。　私は１２歳になりました。　王族では結婚も許されます。　私は大人一人前の機械整備もできるのですよ」
「いいな。　俺はそういう物言いは好きだ。　一人前の仕事は出来るという事が特にな」
「見せてあげますよ。　いまから分解作業を行うところですから」
ポケットの中の携帯モジュールが振動する。
二人に会釈をして、画面を見る。
〔機密保持に重大な危機発生〕
「・・・・ラン、君が解体しようとしているのは、俺の機体じゃないのか？」
「はい。　元に戻すので大丈夫ですよ」
ランが弾けるような笑顔で言う。
こんな輝きに出会う事は久しぶりだった。
「わかった」
「良いのか」
ガワンが言う。
「ランは大人一人前の仕事が出来るのだろう。　ならば自ら結んだ約束は守るということだ」
「そういう考え方もあるな」
「マシンの心配もしたいが、明日からの住処と食事の心配のほうが

先に立った。　案外現金な男なんだよ俺は」
「食事は大丈夫ですが、住居ですか」
ランが思案する
「総務に話を通すのは面倒だなあ」
　生活は何とかなりそうだった。
うまくいけば、機体整備もできるかもしれない。

　ランとミラージュ〔ゲシュペンストｍｋ４〕の整備の約束を結び、機体を倉庫のハンガーに収める。
この機体のＡＩは最後まで命令に承服しようとしなかった。
通常の操縦方法に加え音声入力による操縦方法を追加したため、ことどころこのＡＩは人間くさい反応をする。
操縦者に対して反抗するようなＡＩではあるが、今までの教育によって機体の制御関係はＡＩ側でほとんど行う事ができるし上、モーションセレクトの煩雑さも軽減された。
副操縦士を搭乗させる重量以上の働きをしているのでこのＡＩを下ろす気は無かった。
　まずＡＩに今の現状が異世界に召喚されてしまった事と満足な補給を受けられるか未知数である事を説いた。
ＡＩはしばらく思考すると、ランによる整備を承服した。
整備をするとはいっても、作業者であるランが地上のＰＴに対する知識が無いので、木箱を机に簡単な講義を始めた。
ランが地上から流出したかなり古いパソコンを所持していたので、それとミラージュの携帯デバイスを接続した。
ミラージュ側でパソコンをハッキングして機能を掌握すると、古ぼけたブラウン管の画面にミラージュの概要図が映し出された。

「ラン！　何を勝手に話を進めている」

ガレージの中にルルルが取り巻きの兵士と共に現れた。
「お姉さま。　ご無事で何よりです。　地上語の翻訳が出来ていなければ、解体なんてしませんよ」
「ルルルか。　ＯＳやプログラムは別言語だと思ってくれ。　金属疲労や損傷した箇所を手探りで探していく。ＡＩの自己診断ほどザル診断はないからな」
携帯デバイスからＡＩの非難めいたブザー音が発信される。
　二人はルルルを無視して会話を進める。
「損耗率の高い箇所とかありますか」
「・・・・そうだな」
キーボードを叩き、画面に損耗度の高い箇所を表示させていく。
「姉を無視するな」
ルルルがランの頬をひねり上げる、
「お姉ひゃま痛いれす。　ミラージュの整備研究計画を立てているところなのに」
ランの抵抗はまるで意味は無く、背後から頬を弄ばれる。
「お前は空気を読まない女だな」
ジジは講義の腰を折られ、不機嫌な態度を隠さなかった。
「ク・・・・・ジジ・フラグお前には借りを返してから言いたいことを言う。　ラン！お前は総務課でぐだぐだと手続きをしおって」
「そうしないと色々とまずいですから」
「時間の無駄だ。　ジジ・フラグは、このルルル・アーヴィンの客分だ。　そう言えば簡単に済むのだ」
ルルルが得意げに胸を反らす。
会った時からうかつな少女だと思っていたが、改めてこれが王族だとジジは思った。

「貴様が姫様に無礼を働いた地上人か」
取り巻きの兵士がジジに対する敵意を露に言う。
「イネス殿、私はジジ・フラグに倒された。　助けられた事は命を

借りただけだと思っている」
「おいイネスとか言ったな。　喧嘩腰で喋るのは許してやる。　まず名乗れ」
「イネス・ドーナンだ」
「俺はジジ・フラグ。　やるんだろ？」
肩をすかせて薄ら笑いを見せてやった。
「・・・・・貴様っ」
「腰に下げている剣は飾りか？」
安い挑発だったが効果は覿面だった。
イネスが右手で剣の柄を握る。
その刹那、ジジはイネスに正面に立った。
「っち！」
イネスが跳び退る。
体は後ろに下がったのだが、剣を握る右手をジジの手が握り締めていた。
「動かない、と？！」
イネスの右手は空間に固着したようにその場から引き抜くことが出来ない。
掴まれた右腕ごと引き寄せられ、イネスは背負われて宙を飛んだ。
イネスは硬い地面に背中から叩きつけられ、絶息し、のたうち回る。
口からは潰れたような呻き声が漏れる。
苦しげに這い回るイネスにジジが覆いかぶさる。
首に腕が回り、そのまま締め上げられる。
イネスはそのまま気を失った。
「殺したのですか」
ルルルが蒼ざめて言った。
「すぐに戻す」
ジジがイネスの背中を強く押す。
イネスが咳き込みながら、大きな呼吸を何度も繰り返す。
「お前は一度死んだ」

「死んだだと？」
イネスが思案する。
次第に顔が紅潮し、わなわなと肩が震える。
平手が顔を弾いた。
じんとした痛みが頬に残る。
イネスの目は燃え上がっているようだった。
　こういう目は嫌いじゃなかった。
手痛い敗北を喫しながら、内に秘めた闘志は全く萎えていない。
「とことん相手をしてやる」
「ジジ・フラグ、次は機兵だ。　機兵乗りは機兵の強さが大事なのだ」
イネスが大股歩きで去っていった。

「すまぬ。　イネス殿は私の師匠の様な方なのだ。　今から説き伏せてくるので待っていてくれ」
「さて、ミラージュの代わりの機体を用意できるか」
「本気で戦うのか」
ルルルが言う。
「俺は無駄な争いが嫌いだ。　地上人の戦の仕様を見せてやれば戦闘力の差が分かるだろう」
ラ・ギアス人にも血の気の多い輩は居るようで、一々その者たちと腕比べをしていたのではきりが無い。
序列を分からせて、それでも納得のいかない者を叩き伏せればよいのだ。
「言いにくいのだが、弟子の私ですらあの程度だった。　そなたのミラージュで戦ったとしたら決着は火を見るより明らかではないか」
「ミラージュの整備はランとの約束だ。　違える事はできない。そうだろう？」

「それはそうだが・・・・・」
「私で融通できる機体はブローウェルくらいですよ」
ランが言う。
「しかも非正規品のな」
「はい、お姉さまの仰る通りです。　他の機体の余剰パーツやスクラップを利用していますし、最も不安な要素は私が精霊契約を施術したことです。　本来大地系の精霊と契約を交わした魔装機は、土精の加護で装甲の強度が向上したりするのですが、私の組み上げたブローウェルにはそういった能力向上もありません。　機装兵と変わらないような性能なのですよ」
「手抜きをして組んだわけではないのだろ？」
「当たり前です」
ランが胸を反らせて言う。
「問題ない」

ジジは魔装機兵ブローウェルは簡単な講義を受けただけで動かす事ができた。
そもそもルルルのような少女が簡単に操縦できるのだから、ＰＴのような難易度の高い操縦方法ではなかった。
魔装機兵にはニューロンセンサーという制御システムが組み込まれている。
それは人間の「感覚」に相当するため、搭乗者と同調させる事で機体を動かせるようになる。
「さっき教えた通り、制御盤を握ってみよ」
ルルルはスピーカーを使い、開放されたブローウェルのコクピットの中のジジに命令する。
「ああ」
ブローウェルが乗降姿勢から立ち上がる。
「思い浮かべた動作をなぞる。　便利だが過敏すぎるインターフェイスだ」

ブローウェルが屈伸をしてひざを伸ばす。
腰を落とすたびに両肩の長大なレールガンの重量に振り回される。
　機体がパイロットの思い通りに動く事は便利だった。　ＰＴやＡＭのように自動制御と手動操作が複雑に入り混じったインターフェイスは、パイロットに長い習熟期間を課す。　この精神感応操作というものは体を動かすように操

作する事ができるので、初心者でもすぐに動かすことができた。
つまり、機兵そのものを人体の延長として想像し、動かすという想像力が重要となる。。
「どこまでできるものか」
下段から上段蹴りへの連携させる。
ブローウェルの巨体が空を凪ぎ、突風が機材を揺らす。
両肩の砲に振り回されて、体が前方へ流される。
「ラン！　両肩の砲は外せるか？」
「ワイヤーで吊ってから外します」
ランが叫ぶように言った。
ブローウェルの今の動作で埃を被ってしまったようだった。
「時間はかかるか？」
「砲の排除は、ブローウェル側で操作できます。　左右の青いレバーです」
「ジジ・・・正気か？ブローウェルで白兵戦をするのか」
「そうだ」
「わかった」
「5分後にワイヤー掛け始めます」
「ハッチ閉じるぞ」

#5

見渡す限り草原が広がる。
二機の機兵が対峙し、その足元にはジジとイネスが立っていた。
「始めようか」
ジジが言った。
「・・・・・砲無しのブローウェルか」
イネスが見上げて言う。
ブローウェルには主兵装であるリニアレールガンが外され、接続部分には装甲板が取り付けられていた。
「模擬弾の殺し合いが嫌いでな」
ジジが嘯く。
イネスが挑発で顔を真っ赤にする。
「貴様・・・・全力で叩き潰す」
イネスが言い放ち、二人は機兵へと搭乗していった。
待機状態だった2機が戦闘出力へと切り替わり、互いの距離を開ける。
１００メートルほど距離が開き、互いに静止し、プラズマサーベルを構える。
ギルドーラ?は半身で、目の位置でサーベルを構え、刺突の構えだった。
ブローウェルは両手にプラズマサーベルを握り、腕は下げたままだった。
ギルドーラ?がブースターを吹かしながら一気に肉薄する。
ブローウェルが走り出す。
両手に握ったプラズマサーベルは発信させていない。
二機が一瞬交錯し、サーベルが火花を散らす。
ブローウェルが反転し、粉塵を巻き上げながら大地を滑る。
『土煙で身を隠すか。　ギルドーラから逃げられるかよ。　速度が

違うんだよ』
煙幕を突き抜けようとするギルドーラに、土煙の底からブローウェルが爆ぜるように大地を蹴る。
二度目の交錯。
ギルドーラが咄嗟に斬撃をプラズマサーベルで受ける。
ギルドーラが後方に弾かれる。
（この力感がブローウェルなのか？）
イネスは思わずうなった。
機体重量の軽くなったブローウェルになら力負けはしないだろうと思っていたからだ。
イネスは操作盤のホイールを動かし、機体状況を確認する。
自己診断システムは異状無しを告げている。
目視で四肢の挙動を確認する。
左腕の反応に、僅かだがタイムラグがある。
今の衝撃で神経系がフレームに圧迫されているのかもしれない。
土煙が晴れる。
大地から蜃気楼のように立ち上るマナが、ブローウェルに集まり、装甲の隙間から虹色の燐光が溢れていた。
精霊による陣地形成それがブローウェルの霊的優位を引き起こしていた。
あの機体の契約地は、ラングラン王国ではなく、このサザ公国。
ここはブローウェルの精霊の支配地域だったのか。
C級魔装機兵は、どこにでもありふれた低位の精霊と契約している。
しかし優位な地形による能力修正が行われればB級魔装機とも遜色ない。
ましてその精霊の生まれた地ならば、魔装機兵の能力補正は魔装機神に迫るはずだ。
そもそも精霊の能力が高まれば、操者にはそれなりの適性が求められるはずだし、陣地形成など初心者にできる事ではないのだ。
（もしや聖戦士・・・だとでもいうのか）

目の前の敵はおとぎ話から現れたような人物だとでもいうのだろうか。
まるで嫌な予感は拭えなかった。

「さて・・・ね」
ジジは操作盤に思惟をこめながら操作している。
ブローウェルが思わぬ力を発揮し、想像の動作よりも力が入りすぎていた。
機動力の無さを誤魔化すために、鍔迫り合いに持ち込もうとしたが、押し付ける強さが余りにも強すぎて、相手を弾いてしまった。
得体の知れない力に助けれている。
まさか機体に振り回されるとは思わなかった。
今ジジの背中には冷や汗が流れていた。
ガレージでの操作と演習場での操作の感覚が違いすぎたのだ。
「これが魔装機兵というものか・・・・・」
モニターに現れる言語はまるで読むことができなかった。
だが、今の状態がまずいことだけは分かった。
機体強度以上の機動をしている。
足首周りの反応が鈍い。
何かに取り憑かれたように操縦していれば、多分・・・・まず足回りにガタがくる。
これがゲシュペンストなら、ホバーやブースターで機動をアシストするのだが、ブローウェルにそんな機能は搭載されていない。
操作盤を握る。
挙動をイメージする。
重心を低く、重く、駿馬のように駆けなくていい。
完全に土煙が晴れ、対峙が続く。
ギルドーラ?が僅かに退く。
正面の斬り合いは、力押しで通されると悟ったのだろう。

ギルドーラ?がブースターの出力を上げながら馳せ違う。
掠めるようにサーベル同士が火花を散らした。
再び2機の距離が開く。
ブローウェルは腰を低くしたまま双剣を防御に構える。
ブローウェルの腰が更に低くなる。
じりじりと足が開く。
対峙が続き、ブローウェルの構えがゆっくりと攻撃的なものへと変貌していった。
腰が深く沈み、足が開かれた構えには、猫科の猛獣の様なしなやかさがあった。
断固とした必殺の気を発している。
ギルドーラ?が操者であるイネスの意図を感じ取り、わずかにたじろいだ。
本来ならば機動力で撹乱し、長期戦を計るはずだったが。
しかし生半な覚悟で刃圏に触れれば、手痛い逆襲を予想させた。
いつまでも対峙は続かない。
ブローウェルは今まさに臨界点を迎えようとしている。
意を決するしかない。
イネスは臍を決めた。
ギルドーラ?を１００メートルほど浮上させ、プラズマサーベルを突き出すように構える。
高所から最大加速し、接触の直前、感じるままに太刀筋を決める。
刀身の切っ先に全てを篭めてくれる。
頭の中からは互いの生死の結末は消え去った。

更に対峙が続く。
僅かにブローウェルの双剣がゆれる。
ギルドーラ?のブースターが爆ぜる。
限界まで燃焼させた推進剤が、機体を音速に載せる。
まだブローウェルは動かない。

まさに2機がしようとしたその時、ギルドーラ?のサーベルの軌道が振り下ろすように変わる。
ブローウェルの双剣がギルドーラ?の振り下ろしを防ぐ。
周囲に火花と烈風が走る。
　ブローウェル?の関節から虹色の燐光が漏れ出す。
貯められた力が爆発するようにブローウェルが大地を蹴り、双剣を薙ぎ払った。
ギルドーラ?は強引に太刀筋を変えられ、その切っ先には誰も居ない。
十二分に加速した機体はブローウェルという支えを失い、強かに地面に激突し、地面を転がる。
　それが決着だった。

ガレージには見物していた兵が集まっていた。
「お前は負けた。　二度も」
「・・・・そうだ。　わたしの負けだ」
「お前達、兵士の命は国王の物だ。　それを二度も勝手に使った・・・・・首を出せ、お前の様な自分勝手な指揮官は無駄に兵を殺す」
イネスの腰に差している剣を捨てる。
「こんな座興のようなことで死罪など」
「座興？　二度の真剣勝負だったのだ。　お前の師匠にしてこの程度なのだ。　弟子であるお前の甘い認識は許してやる」
「言い過ぎではないのか！」
「お前の失態は師の弱さが招いた。　弱い女が戦場でどうなるか分かっているのか」
「そんな事を」
ジジはルルルの目を見据える。
ルルルは言葉を繋げる事ができなかった。

「死など生易しい陵辱が待つだけだ」
ルルルが息を呑む。
やはりこの少女は戦争の醜さを知らないまま兵士となっているのだ。
「その通りだ。　ジジ・フラグ・・・・・私は姫様に戦の厳しさを教えられなかった。　今私の心は死んでいった兵の重さで張り裂けそうだ。　終わりにしてくれ」
イネスが跪いて首を下げる
全ての人間が息を呑んだ。
「ルルル、お前の剣を」
ルルルは青ざめた顔をしたまま首を振る。
「姫様・・・・剣を」
イネスが言った
ルルルの視線が泳いだまま、剣が差し出される。
剣を握り、イネスの髪を掴み上げる。
「っ！」
気合と共に剣が一閃する。
ジジの手にはイネスの長い髪束が握られていた。
首はそのままだった。
イネスの肩が震え、そのわななきが全身に広がった。
「張り裂けた心のまま生きてみろ。　今のお前に死は救いでしかない。　もっと恥辱にまみれるのだな」
「殺せ！私を殺せ。　騎士の誇りを・・・・」
イネスが絶叫する。
最後は慟哭が混じり言葉にならないものだった。
「ルルル、これを死んだ者たちに供えろ」
切り落されたイネスの髪の束を渡す。
「はい」
ルルルはイネスの髪の束を握る。
「こんな男だジジ・フラグとは。　女が戦場に立つというだけで、心の古傷を触られ、誰かを傷つけてしまう。　そんな情けない男な

のだ」
「いや、私はそうは思わない。　私の砕けた心に、あなたの言葉がとても染み入った。　何が？とは上手く言えない。　それでも私達が強がって覆い隠そうとした恥部を晒してくれた。　今思えば隠そうとしたことそのことが恥ずべきことだった。　あなたのおかげで私は死んだ部下の事実に向き合うことが出来る」
ルルルが笑う。
砕けた心、その言葉が強く耳に残った。

#0__この章のさいごに（機体解説）（前書き）

1章に登場した機体の解説となります。

#0―この章のさいごに（機体解説）

ゲシュペンストＭｋＩＶ・ミラージュ

＞ｉ３０１９５―３８５１＜

この機体の原型は量産型ゲシュペンストＭＫＩＩ・Ｓ型。テスラドライブを搭載するために出力の高いエンジン〔プラズマジェネレータ〕を内蔵している量産型ゲシュペンストＭＫＩＩ・Ｓ型が選ばれた。

プラズマサーベル以外の固定武装を排除し、高機動と抜群の運動性を高い次元で実現している。

余剰出力を利用して様々な高出力兵器を併用運用できる事が特徴として挙げられる。

この機体の高性能化に当たり、実戦投入まで少ないながら準備期間が存在し、搭乗者のジジ・フラグがモーションプラグラムを深化、再構築した要因は大きい。

次世代機に求められるハイスペックを実現した本機であるが、その出力に見合った兵器が搭載されなかった不運がある。

短時間の任務を想定して装備された大型ビームサーベル〔ＭＢ０４〕は高出力で長大なビームサーベルを形成する事が出来るが、その突破力と引き換えに最大出力時は使用時間３分、冷却時間１分（変動あり）という使い勝手の悪さが目立つ。加えて宇宙用なので地上で使用する場合はすぐに過加熱に陥る。

防御面ではヒュッケバイン系の目指した斥力場による防御を放棄し、積層ビームシールド〔トライビームシールド〕により同等の防御力を目指しているが、例に漏れず最大出力時は使用時間と冷却時間の

折り合いが悪い。反面三基のシールドを分割使用した場合は絶え間なくビームシールドを運用する事ができる。

軽視できない短所を持つ武装ではあるが、絶大な攻撃力と防御力を誇る。

運用する場面を間違わなければ、相手の斥力場ごと敵機を切断する事も可能である。

搭乗者であるジジ・フラグはその短所を補うために、冷却時間中の補助兵装としてＤ７４オートショットガンを装備し、防御面では両手に手甲型のシールドを装備している。

最も操縦性を劣悪にしている高機動時の重力制御推進方式とジェット推進方式を併用した複雑な操作を理解しなければいけない。

（メリットとして別系統の推進方式なのでお互いに干渉し合わない、唐突に進行ベクトルを変更する場合テスラドライブのチャージ無しにジェット推進で変更する事ができる）

部分的に次世代機を凌ぐ性能を持っているが、武装やセッティングにより搭乗者の個性を大きく反映してしまう側面を持っている。隙の無い機体であるが、例に漏れず超・上級者向けの機体となっている。

・作者より

作劇の都合により銃器が装備されていませんが、導入部以前の戦闘で銃器を使い果たしたという演出のためです。

本機は接近戦闘用の機体ではないということを弁解しておきたいです。

ミラージュにしばらく銃器が装備されない事は、ラ・ギアスの銃器の管制用のシステムと地球側の管制用システムが違うという演出のためなのです。

手榴弾やダーツなど投擲するようなものは該当しませんが、銃自体が照準システムを持っているようなリニアレールガンの装備はアウトにしています。

#0―この章のはじめに

あらすじ（1）
地上世界の戦士ジジ・フラグは地球上空・大気圏で小惑星落下を阻止するためにミラージュ〔ゲシュペンストｍｋ４〕で戦闘を行った。戦闘は苛烈を極め、敵の総帥を撃墜し、小惑星に取り付いた。
その時突如として戦場は光に覆われてしまった。
ジジが意識を取り戻した時、ミラージュは謎の大地の上空を飛行していた。

偶然戦闘に巻き込まれ、サザ公国第一王女ルルル・アーヴィンを救い出し、ここが地球内部に存在する異世界ラ・ギアスであることを告げられる。

国王により王女救出の功績を認められるものの、地上人であるジジを不審に思うサザ公国の戦士イネス・ドーナンに勝負を挑まれる。
ジジは技量の差が大きく難なく勝利するものの、異世界でも戦いに巻き込まれていくのだった。

■この章の登場人物■
ジジ・フラグ
地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。
ラ・ギアス側の召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。
＞ｉ２９９６７―３８５１＜

シャルロット・フラグ
サザ公国の建国功臣の末裔。謀略により家族を抹殺される。
ジジ・フラグに従者として下賜され、今は弟子となっている。
＞ｉ２９９７０―３８５１＜

ガワン・カーワン
サザ公国の建国功臣の末裔。元親衛騎士団長だったがその職を辞している。
今はラン・アーヴィンの従者となっている。

ラン・アーヴィン
サザ公国第四王女。整備兵として従軍している。

カイン・カーワン
ガワンの長子。機兵のパイロット

クロ（刺客）
何者からか差し向けられた暗殺者

#1

ジジ・フラグが異世界ラ・ギアスのサザ公国に召還され、一ヶ月が経過した。
ジジはムートン市の軍営のガレージでラン・アーヴィンと共にミラージュ〔ゲシュペンストmk4〕の整備を行っていた。
時計は2時を指していた。
ランは食堂へ遅い昼食を食べに行き、ジジもミラージュ〔ゲシュペンストmk4〕の足元で昼食を摂っているところだった。
弁当の包み紙を開き、中からサンドイッチを取り出す。
食事は手早く取れるよう、軽めにしていた。
二つ目を頬張っているとき、ガワン・カーワンが現れた。
ガワンの隻腕が敬礼をする。
ジジも敬礼を返す。
「今一息入れているところだ」

二人は硬いパイプ椅子に腰掛け、空箱を卓にして向き合った。
ポットに入っているコーヒーを出した。
痩せた香りにガワンの顔が渋る。
軍営のコーヒーなどたかが知れているのだ。
「ジジ・フラグ、お前には陛下から褒美が下賜されることとなった」
ガワンが平時より声を潜めながら喋る。
「俺は軍のガレージを間借りできるだけで十分だったんだが。　聞こう。　何を下賜されるのだ」
「従僕一名と屋敷を下さる」
「困ったな。　相手が国王では軽々に断れない。　国王の遣いでやってきたんだから、飲ませる気なのだろう？」
「そうだ。　ガレージの隅で寝袋に入って夜を過ごすような生活はやめろということだ」

「風雨は凌げ、食事も出る。　十分だ」
「・・・・・幾つになる」
「３０くらいだ」
　まだ熱いコーヒーを飲む。
不味い。
ただ苦く酸っぱいだけだった。
「傭兵という根無し草のままで良いのか？」
「死を傍らに抱いて生きてきた。　家や生活など余計な荷物なだけだ」
「もう少し人らしい営みの中で生きてみろ。　そのための家ではないか」
「俺は戦災孤児だったらしい。　それを軍人に拾われ、兵士として育てられた。　俺にとっては軍こそ人の営みで、仲間が兄弟であり、上官が父親だった」
「歪だなジジ・フラグは」
　ガワンがため息を吐いた。
出されたコーヒーに初めて口を付けた。
一瞬顔が歪み、一気に飲んだ。
「そう思うのならば放って置け」
「そうはいかない、従僕は連れてきた。　これだけは受けてもらう。
　若い女だ」
　ガワンはにこりとも笑わない。
若い女という言葉がひどく耳に残った。
「・・・・・連れてきたな」
「ああ」
　ガワンは俺が出した不味いコーヒーより、もっと不味い何かを飲ませようとしている。
それだけは確信に近かった。

連れてこられた者は質素な紺色のドレスを着た少女だった。
ジジの顔が渋くなる。
「どうしろと言うんだ？　俺にあの少女を」
「下賜された物だ。　妻にしようと犯そうと好きにしろ」
「・・・・」
「それではいけないのか。　男として抑えられないものはあるだろう」
ガワンの言葉にはまるで心が動かなかった。
それより少女の顔がまるで動じなかった事に僅かな驚きを覚えた。
ジジはじっと少女を見た。
着ている物が質素なだけで、本人の持つ雰囲気はたおやかで、庶民のそれではない。
武家の女ならばもっと堂々としている。
貴人か。
まるで後ろ盾の無い地上人を貴人が頼るのか。
尋常ならざる生い立ちがあるだろうと思えた。
「本当の事を言え。　俺はその娘を殺すぞ」
「・・・・殺すか」
「褒賞を役人ではなくお前が授与している時点で、ただならぬ事情があると思った。　巻き込まれてやってもいい。　しかし事情は全て話せ。　この娘は俺の様な男に「殺す」と言われ、微動だにしなかった。　いったい何を見たんだ」
「全ては話せない。　話せるだけ話す」
「聞こう」
「この娘の名はシャルロット、その身に流るる尊い血のため、本名は伏せなければならない。　事の発端は母親とさる人との間に起きた不義密通だった。　密やかに二人は逢瀬を繰り返したようだったが、ある時この関係が、さる人の奥方に露見してしまった。　大変嫉妬深い方なので、母親の事を許さなかった。　とうとう刺客を差

し向け、母親ばかりか家族全てを殺してしまったのだ。　刺客は腕は立つものの、元々暗殺者ではなく母親だけを殺して去ろうとしたところを家族が次々と現れ、闘っているうちに血に酔って殺戮をしてしまった」
「その生き残りが、この娘か」
「そうだ。　この娘は兄弟のはらわたに隠され、生き残る事ができた」
「この世の地獄を見た。　そんな言葉しかないな」
「この娘を受け取ってくれるな」
「いや。　俺の様な男に預けるよりもお前の方が適任だろう。　剣術でも教えてやればいい」
「この事件は表沙汰に出来ないことだ。　一家が皆殺しにされた事となり、遺体ごと家は燃え尽きた。　シャルロットは生きてはいけない人間だ。だからシャルロットはこれからも刺客から命を狙われ続ける。　それだいうのに、俺には彼女に厳しくする事ができないのだ」
「お前・・・・母親のほうに惚れていたな、面影を追ってしまうのだな。　柄にもない事を尽力しているカラクリはそれだな」
「ああ」
　悪びれもせずガワンが頷いた。
「兵としてしか扱わない。　それでいいか」
ガワンが頷く。
「シャルロット、今日からお前が世話をする、ジジ・フラグ殿だ」
「・・・シャルロットです」
「ジジ・フラグだ」
虚ろな目をしていた。
黒い瞳からは生きる事への絶望だけが感じられた。
「先に言っておく。　ガワン殿はお前を生かしたいと思っているようだが、俺はどうとも思わない」
シャルロットと視線が合うが、彼女は俺を見ていない。

死人の目だ。
はっきりとそう思えた。
「死にたいか」
シャルロットが頷く。
「死にたければ死ね。　今なら名も無き者として葬ってやる」
シャルロットに短剣を渡す。
迷わずシャルロットは喉元に刃を当てる。
短剣を握った手は震えなかった。
「父と母は死ぬときどんな顔をしていた」
シャルロットの手元が止まった。
目が閉じられる。
「兄弟のはらわたは温かかったか」
シャルロットの体が一瞬震えた。
見開かれた目が宙を見上げ、視線が向けられた。
呼吸が乱れた事が見て取れた。
彼女の網膜では断末魔の光景が再生されているのだろう。
「目の前にいる虚ろな目をした死人に言っているだけだ。　早く死ね」
「邪魔しないでください」
シャルロットが言う。
今こそ。シャルロットが呼吸を整える。
「・・・・・仇を討ちたいのか」
シャルロットの目、暗い炎が灯っている。
深い絶望を組み伏せて、彼女の胸の内には怒りが渦巻いている。
「無理だな。　お前のような娘は何もできない。　呪詛を抱きながらここで朽ちるのだな」
形の良い唇がわなわなと震え出し、憎悪の表情へと変貌した。
「なんだその目は、不満か。　ならばその短剣で俺を突き刺せ。ここだぞ」
ジジは胸の真ん中を指し示す。

シャルロットが短剣を構える。
それは短剣を突き出しただけの拙い構えだった。
「しっかり握れ、刃は肋骨に対して水平に構えろ」
構えられた刃が水平になる。
体ごとぶつかる様に心臓めがけて刃が迫る。
刃は皮膚を貫いたものの筋肉に遮られ、僅かに刺さるだけだった。
シャルロットが懸命に刃を押し込もうとするのだが、ただ刃先が滑るだけだった。
シャルロットを突き放す。
「非力だな。　もう一度刺せ」
シャルロットの目には、もう何も無い。
ただ動揺し、僅かに血に塗れた刃先と傷口を何度も見返すだけだった。
一歩踏み出す。
シャルロットが下がる。
震えが膝から這い上がり、今では体が震えている。
「震えるな。　震えていては死ぬ事も生きる事も選べない」
シャルロットの肩に触れる。
あまりにも華奢で折れそうな体だった。
思いがけない不幸を背負い、それでも生きなければならない。
そんな宿命を背負うにはあまりにもか弱い少女でしかなかった。
「もう。　生きたくない」
シャルロットが憔悴しきった声で言う。
どんな言葉も慰めにはならない。
喪失したことがある者だけが共感できることだった。
だが自分は慰めを言えるような器用さは持ち合わせていないのだ。
ぽつりと言葉が出た。
「俺にとっては生きる事そのものが闘いだった」
シャルロットが虚ろな目を向ける。
「本当だ。　軍歴がそろそろ２０年を超えるが、俺は寄る辺無く世

界を彷徨い、闘いしか知らない。　そんな男の行き先は戦場だけだった。　俺にはそこにしか居場所が無かった」
　自分の事を喋っていた。
シャルロットが他人とは思えない境遇だから言っている。
　ガワンが噛み締めるように無言で頷いた。
「戦場だからな、無造作に命が摘み取られていく。　俺にとって最初の仲間達の最後は、どれが誰のはらわたか分からないものだった。
　それから何度も死域を彷徨う闘いを続けた。　死にそうな時、俺の心に棲んでいる逝った友は俺を呼んでいなかったよ。　幻影だと思う」
「幻・・・・影」
「その幻は俺の心が都合よく紡ぎ出しているにしか過ぎない。　本当の本当の本当に根限り駄目で、何もかもどうしようもない時はさ・・・・・逝っていいと思う。　お前はどうする？　お前の内に棲む家族は微笑んでいるか」
「・・・・・私は」
かすれる様な声だった。
唇が「闘う」そう告げた。
「俺の従者になるのだな」
「はい」
「これよりお前は、シャルロット・フラグを名乗れ。　身上を聞かれても俺の身内と答えればいい。　お前はこの世界に縁の無い地上人だ」
「はい」
胸の内には修羅を一人増やしてしまった、という後ろめたさがあった。
「これでいいのだ」
　ガワンが宙を仰いでる。
表情は見えなかった。

#2

その日はガワンとの話を終えると、シャルロットと供に下賜された家へと向かった。
その家はムートン市の軍営の傍6キロほどに在った。
その間二人が交わした言葉は、シャルロットの年齢の事だけだった。
シャルロットは15歳だった。
与えられた家は、退役した軍人の屋敷だった。
以前の住人は機兵部隊の将官だった。
その者が軍で働くために立てられた屋敷であった。
外観こそ小さく質素であったが、屋敷の作りは頑丈そのものだった。
屋敷の中に入ると全ての部屋が清掃され、清められていた。
ガワンが住居として渡すために体裁を整えたのだと思う。
縁側に座り、小さな庭を眺める。
胸中にはほっとした安堵感があった。
このままルルの客分として生活する自分に我慢が出来なかったのだ。
惰性のまま流されていたのでは、いつか自分を内側から壊したくなってしまう。

「俺の従者であるということは、弱くては務まらない。　分かるな？」
「はい。　ご主人様」
胸の奥を潰されような痛みだった。
従者として扱う事は決めたものの、この呼び方だけは嫌だった。
穢れない少女が口にしていい言葉ではないと思った。
「俺のことは、ジジ殿と呼べば良い」

「はい」
「朝昼夜の三度食事前に３０分だけ調練を付けてやる」
「はい」
「死にたくなければ、抵抗することだ」
「死にますか？」
「ジジ・フラグの調練とはそういうものだと思え。　今に分かる。
　庭に下りて向き合え」
二人が縁側から降りて向かい合う。
「俺に触れてみろ。　それが今日の調練だ」
　シャルロットが怪訝な顔をするが、すぐに元の無表情に戻る。
目の前に探ろうな手が伸びる。
一歩だけ前に進み、足を払う。
シャルロットの体が強かに地面に打ちつけられる。
「立て。　もう一度だ」
シャルロットが立ち上がり、視線を低くしながら手を伸ばす。
　伸ばした腕を引き寄せ、体制を崩したところで足を払う。
受身を知らないシャルロットは、再び地面に叩きつけられる。
「立て」
ジジが表情を変えずに言う。
シャルロットが立ち上がる。
いい目だと思った。
修羅場を越えてきただけあって、痛みで心は折れない。
戦士には強靭な肉体と同様に強靭な魂が要る。
　シャルロットが腰を落としながらにじり寄る。
体制を崩されるから足を払われるのだと思ったようだった。
　シャルロットが地面を蹴る。
目の前には何も無かった。
ジジは覆い被さるように背後に回り、両腕で首を絞めながら地面に
押さえ込む。
シャルロットが息苦しさから、渾身の力で跳ね除けようとする。

首から両腕が外れ、暴れる両腕を捉え、そのまま彼女の襟で首を絞める。
シャルロットは動かなくなった。
虚脱したシャルロットの半身を起こして、背中を押す。
蘇生したシャルロットが咳き込みながら大きく呼吸をする。
横たわるシャルロットの胸がふいごのように大きく上下する。
「起きろ。　もう一度だ」
シャルロットは立ち上がり、腰を低くしたまま動かない。
「動かなければ返し技は無いな。　俺から仕掛ける事を忘れるな」
ジジが構えずに歩み寄る。
シャルロットの両手が体を掴もうと伸びる。
最初のような曖昧な挙動ではない。
　シャルロットの両手が払われる。
防御の無くなった体に拳が打ち込まれる。
シャルロットは地面に跪いた。
背中が大きく上下している。
シャルロットが立ち上がる。
　同じやり取りを何度か繰り返し、地に伏せたシャルロットが立ち上がる。
息も絶え絶えだった。
ジジが背中を向ける。
「３０分だ」
シャルロットが構えを解く。
ジジが振り返りながら言う。
「調練が辛く、死にたくなったらいつでも言え。　すぐに殺してやる」
「言いません。　私は」
「今の自分の弱さをよく覚えておけ。　俺くらいの腕があればお前を３０分で百度殺すことは苦ではないのだ」
「・・・・・はい」

「しかし・・・・よく立ち上がった。　悲鳴も上げなかった。　女とは思わず調練をつけられる」
「・・・・・」
　シャルロットの目が大きく見開かれる。
何度か視線が泳ぎ、顔が伏せられた。
表情はよく分からない。
「おい、食事は作れるのか？」
「いいえ。　作ったことはありません」
「・・・・今日は一緒に作ってやる」
「作れるのですか」
「旨くはないぞ」

　台所へ行き、食料庫を探すと一通りの道具と調味料らしきものと乾物、米、小麦粉、焼酎（らしき匂いのする蒸留酒）、木炭があった。
生鮮食品は無い。　ガワンが用意したものは日持ちする食品と保存食だけだった。
この世界の調味料は分からないので、調味料の一つ一つを味見しながら確認する。
岩塩、砂糖、胡椒、粉唐辛子、魚醤、果実酢、他にはハーブや薬草を粉末にしたスパイスがあるのだが用途が分からなかった。
「この干し魚を千切れ」
　シャルロットが渡された干し魚を千切る。
やはり手つきは危ない。
　ジジは何も言わなかった。
鍋に並々と水を注ぎ、米を入れる。
その鍋をコンロに置く。
コンロの釜の中に適当に折った木炭を入れ、細かく砕いた木炭を紙で包む。

その紙袋にマッチで火を付け、釜の中に入れる。
釜の中がじわじわと燃え上がり、コンロが熱される。
後はじっくりと水を足しながら煮込むことで粥が出来上がる。
　釜の中の炎を見つめる。
木炭が小さく爆ぜている。
しばらく待っていると鍋から泡が吹き出してきた。
「終わりました」
「晒しに包んで縛れ」
シャルロットがほぐした干し魚の身をさらしに包む。
晒しを鍋に沈め、熱されて減った分の水を更に足す。
「あとは適当に煮るだけだ」
「スープ・・・・ですか」
「粥だ」
「カユ？」
「食えば分かる。　ラ・ギアスにもある料理だとは思うのだがな」
　コンロの前に二人は椅子に座り、火をじっとみつめていた。
無言だった。
1時間も経つと、鍋の中は最初の半分くらいの量になっていた。
鍋からは魚の旨そうな匂いが立ち上っている。
晒しを取り出し、出汁の出た中身を別の小鍋移す。
焼酎と塩、砂糖を入れて味を調える。
粥を煮ている鍋を火力の弱い部分に移す。
　コンロの釜に木炭を足す。
小鍋に魚醤と砂糖、粉唐辛子を入れる。
香ばしい匂いが台所に立ち昇る。
強火で水分を飛ばし、付け合せの佃煮（のようなもの）が出来上がる。
「食うぞ」
食卓に鍋を置き、粥を二人分の器に注ぐ。
　ジジは何も言わずに粥を啜る。
このラ・ギアスでは夕食の前に祈りを捧げるが、ジジがやることは

無かった。
この男には祈るべき神は居ないからだ。
「食え」
シャルロットが一さじ粥を飲み込む。
何度も粥をすくっては飲み込む。
「・・・・・とても、おいしいです」
「そうか。　もっと食え」
ジジは2杯目の粥を啜る。
「なぜ・・・・おいしいのでしょうか？」
シャルロットの頬は濡れていた。
「私は、おいしい物を食べている自分を許せません」
「そうか」
ジジが器を置く。
「生きている事は浅ましい。　どんな悲しみと屈託を抱えようと腹は減るし、食う物は旨い。　それが生きている事だ」
シャルロットの頬は次々に溢れる涙で濡れていく。
どんな苦痛でも泣かないと思っていたが、こんな事で泣くのだと思った。
自分はこのような純粋な少女を修羅に仕立て上げようとしているのだ。
どうしようもない事なのだと思った。
屈託と一緒に粥を飲み込む。
「食え。　まだ死ねないのだろ」
「はい」
すぐに鍋の中身は空になった。

#3

深い夜陰に包まれた屋敷の外に殺気がいくつかあった。
肌を刺すような気配に目が覚める。
寝室に異状は無かった。
隣のベッドで眠るシャルロットも生きている。
「起きろ。　音を立てずにベッドの下に隠れろ」
シャルロットが目を覚まし、頷いた。
今から殺戮が起きようとしているのだと分かったようだ。
「しばらく隠れていろ。　今のお前では足手まといだ」
シャルロットがベッドの下に隠れる。
囲むような気配は夜の静けさに溶け込み、まるでそこに誰も居ないようだった。
錬度のまばらな１０人くらいだな。
夜気にまぎれる衣擦れと呼吸から、漠然とそう思った。
シャルロットがガワンの庇護から外れた直後の襲撃、今まで彼女が暗殺者に監視されていたのだと確信した。
寝室の窓と扉に、僅かだが人の気配があった。
夜具を体から外し、足音を立てて歩き、扉のある壁を背にする。
廊下の気配が揺らぐ。
音を立てて鞘から剣を抜く。
扉が開き、黒い影が二つ躍り出る。
手には短剣を持っている。
すれ違うように刃を走らせる。
一人目の首筋から鮮血が噴出す。
二人目は背後から背中に短剣を突こうとしていた。
振り向きざま、短剣を弾き、相手の胸に胸に刃を滑り込ませる。
男は短い悲鳴を上げ硬直した。
窓が破られ、長い銃身だけがジジの背中を狙う。

激しい発砲音と共に寝室に散弾がばら撒かれる。
周囲に埃と煙が立ち上る。
続けざまに４発撃ち込まれた。
ジジは死んだ男の体を盾していた。
体には傷一つ無い。
破られた窓から人影が二つ、制圧したであろう室内を覗く。
同時に彼らの額には短剣が突き立っていた。
ジジは人影を察知すると同時に、奪った短剣を投擲していたのだ。

窓から先に襲撃されていたら死は免れなかった。
機先を制し、僅かな安堵と共にジジは埃に塗れた顔を拭った。
今の自分の装備には散弾に対する防御の術は無かったし、致命傷を受けたまま扉の外の敵は撃退できなかった。
物音を立てて扉の襲撃者を待ったのは賭けだった。
眠っていて脅威の無いはずの対象が、起きていることが彼らの判断を狂わせたのだろう。
窓の外に出て、襲撃者の銃と弾薬を奪う。
形状からショットガンということが分かった。
軍用のコンバットショットガンというよりは狩猟用の猟銃に似ている。
構造は地上の物と何ら変わりなく、チューブマガジンに四発のショットシェル（弾丸）を装填し、ポンプを引く。
襲撃者のリボルバーも奪う、装填されている弾丸と銃口から想定すると、地上ではマグナム弾を使用できる型のように思えた。
屋根から襲撃者達が現れる。
数は６人。
迷わずショットガンの銃口を屋根に向けて発砲する。
発砲音と共に屋根から二人が転げ落ちる。
一人は顔に散弾を受け、もう一人は胸を押さえている。
窓から寝室へ戻る。

天井からは銃弾が雨のように注がれる。
照準すらしていない弾丸はまるで当たらない。
弾薬の無駄だと思えた。
廊下へ出る。
外から二人が侵入し、発砲する。
小刻みに動き、的を絞らせないようにする。
相手が発砲する。
暴力的な風切り音が背後にすり抜けていく。
相手の照準が安定するのにあと二秒もかかるだろうか。
ショットガンのトリガーを引く。
銃口から弾き出された散弾は狭い廊下での威力は十分すぎた。
散弾は襲撃者の全身にばら撒かれ、致命傷を与える。
倒れ悶える襲撃者達に腰に差したリボルバーの銃口を向ける。
撃鉄を引き、二度発砲する。
弾丸は頭部を粉砕した。

台所に向かう。
食料庫にある小麦粉の袋を破る。
２０キロ程あった中身を数度、宙に放り投げるようにばら撒く。
台所が白い煙に包まれる
台所に足音が三つ近付く。
ジジは音を立てずに勝手口からそっと外に出る。
窓の位置を確認する。
台所の扉が開く気配は無い。
入り口の扉で粉塵が晴れるのを待つか考えているのだろう。
「鈍い」
台所の窓に向かってショットガンを二発撃ち込む。
激しい轟音と共に台所が爆発する。
ジジの撒いた小麦粉の粉塵と酸素が混合され、ショットガンの弾が
室内に入った時の摩擦で粉塵爆発を引き起こしていた。

ジジは素早く台所に入ると、扉に向かった。
三人の襲撃者が顔を抑えてのた打ち回っていた。
ジジはショットガンのトリガーを二度引いた。
銃口から吐き出された散弾が彼らを絶命させる。
　あと一人残っていたはずだ。
ジジは弾切れになったショットガンを捨て、リボルバーを握った。

庭に出ると、黒ずくめの男が立っていた。
「やるな」
男が言う。
穏やかな佇まいだったが、気力は充溢し、視線に抜け目は無かった。
「初手で退くべきだった」
「今にしてみればそう思う。　心のどこかで数を頼みにしてしまった」
「だと思った。　戦い方に工夫が無い」
「辛辣だな」
「襲撃だけが暗殺の全てではない。　もっと日常の営みの中で殺すやり方もあったはずだ」
「こればかりは、依頼人のオーダーでな」
「依頼人とは」
「言えないな」
男が低く笑っている。
笑い声は乾いていたが、声色が明るかった。
少女を一方的に嬲り殺す嫌な仕事に、思わぬ獲物が居たといったところだろう。
「この男が私の家族を殺しました」
縁側にシャルロットが立っていた。
「リーゼロッテ様」
「この少女はシャルロットという、地上人だ。　そういう事にして

いる」
「この少女を匿うか。　可愛げな容貌をしているが、この娘がもたらすものは破滅ということを分かっていなかったな」
「分かっていないだろうな」
　ジジの冷静を装う胸中に、はっきりと怒りが燃え上がった。
誰が好き好んで報復者への道を歩むものか、シャルロットにも人並みの幸せがあったはずなのだ。
心の傷を埋める間も無く、名を隠し地上人の従者をやらされている。ほんの少しの喜びに涙する今の姿は、無残としか言いようが無かった。
「生きて依頼人に会えれば言ってやれ」
「聞こう」
「貴様の首はシャルロット・フラグが打つ事となるだろう。　とな」
「・・・私が」
離れたシャルロットの視線に動揺があった。
「嫌か？」
「討ちます。　私が」
シャルロットがはっきりと言った。
握った拳がわなないていた。
「待て。　・・・・・貴様の名は」
「俺か。　俺は地上人のジジ・フラグだ」
「ジジ・フラグ、誰に弓を引くのか分かっているのか」
名前を出せない地位に居る人物、ジジの予想は当たっていた。
「人の貴賤が背負った罪を軽くするとでも思うのか？　　その思い上がりに俺達が鉄槌を下すまでだ」
男が口を開いたまま「鉄槌か・・・確かにな」と呟いた。
「そういった痺れる言葉を久しく聞かなかった。　俺の事は「黒」とでも呼ぶがいい」
「暗殺者が名乗るのか」
「ただの男として、貴様とは闘おう」

「始めるぞ・・・・黒」
「こい。　ジジ・フラグ」

黒は短剣を逆手に持ち、半身だけを相手に向け、体で短剣を隠していた。
黒が短剣を抜いたとき、刀身が見えたが、はっきりとした長さが分からなかった。
得物が短剣というだけでは相手の間合いが読めない。
こちらの持つ剣より遥かに間合いの短い短剣では間合いで不利なはずで、それでも短剣を遣うということは、必殺の工夫を凝らしていると思えた。
ジジは腰に差したままのリボルバーを抜く、撃鉄は既に起こしてあった。
ジジは左手だけで照準をし、引き金を引いた。
三度発砲音が続く、黒は弾道を読んで僅かに動いて避けていた。
残弾は一発。
再び場が膠着する。
予想通りだった。
黒の体捌きは俊敏で、それに絶対の自信を持つが故の武器選択だったのだ。
刃を合わせることなく相手を切り抜ける技を持っている。
短剣に毒を塗っているかは分からないが、殺傷能力を高めるために塗ってることは十分考えられた。
じりじりとした空気の中、二人は少しずつ間合いを詰める。
二人の距離が3メートル程になったとき、ジジが両手から武器を捨てた。
こぼれ落ちたリボルバーが暴発し、黒の頬を掠める。

黒の表情は動かない。
黒には最初の対峙の頃の様な武器を変更する余裕は無かった。
「黒、ここまできたらやるしかねえよな」
「・・・・やるさ」
黒が呟く。
黒の体が沈み、低く跳躍する。
　ジジは黒の腕を掴んでいた。
黒が背後に跳ぶ事は無いと思っていた。
同時にここまで膠着しては、すれ違いざまに斬り付けるしか手は無だろうと思った。
読まれている手だけに避けられる事も考慮し、そのまま通り抜けると確信した。
間合いさえ開けば銃器で先制できるからだ。
　黒が掴んだ腕を短剣で切り払う。
短剣を握る手を掴み、ジジがそれを防いだ。
互いに押し合う力が拮抗する。
「ぐっ」
黒から苦悶の声が漏れる。
短剣を握った指の数本が潰れるように折られたのだ。
黒が左手を振り払い、押し込む右手に手を重ねる。
刀身はまるでその場に固着したように動かない、それどころか黒の力は押し返されていた。
ジジに向けられていた切っ先が次第に自分に向けられる。
黒は短剣ごと右手を握られ、手を離すことが出来ない。
ゆっくりと切っ先が黒の胸に突き刺さり、胸骨を砕く。。
口角から泡を吹きながら、必死に抵抗するが、刀身の全てが胸に押し込まれた。
　黒の体が虚脱し、口から大量の血を吐く。
ジジの顔が真っ赤に染まる。
ジジが黒の胸から短剣を引き抜く。

黒は目を開けたまま立っていた。
表情は穏やかだった。
「根限り・・・・」
ぽつりと掠れた声で黒が言った。
「ああ。　やったよお前は、根限り」
黒が頷く。
瞳から光が失せ、黒が地面に倒れた。

#4

カイン・カーワンにとって三年ぶりの帰郷だった。
ケナブ市の生家の佇まいは、住んでいた頃より色褪せていた。
門前で帰郷を告げると、出迎えた使用人が平伏し、父のガワン・カーワンが待つ居間へと通された。
久しぶりの父だった。
やはり左腕は無い。
父が朗らかな顔で笑い、残った右手で握手し、抱擁を交わした。
「父上が家に居られるとは珍しいですね」
「お前が戻ってくるので、ラン様に休みを頂いたのだ」
「恐れ入ります」
今この家には誰も住んでいない。
自分が帰郷するために父が使用人を雇い、家の手入れをさせていたのだろう。
母親が病没してから、お互い家を空けるようになった。
それは母親が生きていた頃の暖かい空気を避けているようだった。
「国境の軍にも都に地上人が召還された。　との噂を聞きました」
「ああ」
「その人物が、ルルル姫様に召還され、窮地を救ったなどと・・・出来すぎた話だと思いました」
「事実だ。　精兵のアゲイド7機を瞬く間に斬り伏せた。　興味があればラン様から記録を見せてもらうと良い」
「たった一機で斬り伏せたのですか？」
「時間にして1分も掛かっていない。　闘いそのものは止まっている棒を打つように容易いものに見える」
「その地上人を父上なら倒せますか」
「難しいな」
父の回答に逡巡は無かった。

「サザ公国にこの人在りと言われた父上ですら」
「お前はまだまだ若いな。　男の価値が力そのものであるという考え方は幼いとも言える。　人は思わぬ長所を武器にする者も居るのだから」
「はい」
短く答えると父は頷いた。
「そうだな・・・・まずお前の疑問に答えると、戦闘力だけならば私を含めて同等かそれ以上の人物は数人居るだろう」
　父が数えるように指を折り、宙を見上げる。
六人・・・・。
それも戦闘力と限定した想定である。
「戦争や闘争といった状況となると話は別だ。　ジジ・フラグは２週間前に暗殺者に襲撃され、その刺客全てを殺している。　私が驚いたのは、その時の戦闘だ。　刺客の武器を奪うこともさることながら、粉塵爆発を利用して刺客を葬ったことだ」
「鉱山など起きる事故の爆発だと思いましたが」
「それをあの男は、ばら撒いた小麦粉と酸素を燃焼させることで引き起こしたのだ。　炭粉の爆発よりは威力は落ちるのだが、瞬間的に燃焼した粉塵は眼球や肺を重度の熱傷にする。　対人兵器としては十分すぎる威力だろう」
「・・・・戦いとしては邪道ではないですか」
「そうだ。　だがあの男は正統な戦いを知らないわけではない。軍歴の１０年を正規軍で、次の１０年を流浪の傭兵として過ごしている男なのだ」
「あの男は幾つから軍人なのですか」
「１０の頃には従軍していたらしい。　戦場で軍人に拾われたことがきっかけだったようだ」
「居るのですね。　こんな男が」
「あの男を万能と思わないことだ。　故郷を持たない故に、一つ所に留まれず、平和にも馴染まない。　傑出した能力を持っていても、

守るべき者を持たない軍人は存在価値が無い」
「それでも父上はあの男を軽蔑していない。　そのように聞こえます」
「そうだな。　私もあの男のように思うさま闘ってみたいと思う。
　違うな、闘っていればという後悔だ・・・・・」
「ターナー家の事ですか」
「そうだ。　もしも闘っていれば。　無二の友と命を失っても、誇りだけは守れたのだ」
　父の両肩は何かに耐えるように、わなわなと震えている。
カーワン家とターナー家の親交は古く、父が準近衛騎士に任命されてから２０年以上続いている。
ターナー家の当主であり、リーゼロッテの父親であるハノン・ターナは父にとっては朋友であった。
母が存命の時には、年に2度家族でターナー家の屋敷に訪れる事を我が家の行事にしていた。
自分にとっても長兄ナーガと次兄ヤノンは剣友だった。
ターナーの屋敷に訪れた時は兄弟二人を山に誘い、かなり過激な修行をしたことがあった。
過ごした時間は長くなかったがお互い通じ合うものがあり、あの兄弟とは結びつきが強かったと思う。
　父が残った右拳を卓に乗せる。
余程力が篭っているのだろうか、卓がみしみしと軋みだした。
「だが、予感だけはあったのだ。　それも昔からだ。ターナー家にリベル殿が嫁いだ時から、不吉な予感はあった。　それでも、ターナー家は建国の功臣の一族だから大事には至らないと思い込んでいた」
　父が苦悶するように目蓋を閉じた。
「そして今日に至った。　私は妻を喪い、お前は独り立ちをしていた。　何の気兼ねなく闘うことが出来たはずだった。　その後悔だけが心で疼いている」

「しかし」
近衛騎士団長という肩書きを失った父に何が出来たというのか。
あまりにも残酷な言葉が続きそうなってしまった。
「助かったリーゼは兄弟のはらわたに隠されて生き延びたのだ。
心に癒し切れない傷を背負い、家名を隠して生きるているのだ。
ターナー家の娘がだ。建国功臣の一族が皆殺しされているのにだ」
「ですが、公安や軍事警察が動いているのでしょう？」
「この事を軍人が探ってはまずい。　お前達軍人にとっては絶対的な権威を持つ相手を敵に回すことになる」
「それは一体なんですか」
「この国に忠誠を誓う限り、知ってはいけないことだ」
「・・・・・国家権力ですか」
二の句を遮るように、父が言葉を重ねる。
かなり語気は強い。
「よいか。　ターナー家の凶事を他者へ問うことを禁ずる。　お前が想像しているよりこの事件は重いのだ」
「わかりました。　一つだけよろしいでしょうか」
父が頷いた。
「ターナー家・末妹リーゼロッテは誰が保護しているのですか？」
「ジジ・フラグに預けた」
顔面から血の気が引くのが分かった。
同時に心臓が大きく脈打ち、一気に血が熱くなった。
あの可憐な少女が地上の獣に預けられているのか・・・・。
そう思えば、動揺をまるで隠せなかった。
「なんということを今すぐ引き戻すべきです」
「私には暗殺者からあの娘を守る力は無い。　お前にはあるのか」
父の言葉には一切の楽観的な想像はなかった。
刺客の襲撃を防ぐことを第一に考え、地上人ジジ・フラグに預けたのだろう。
その采配は的中し、刺客を退けているのだ。

「それは」
「やめておけ。　家族に続いて、お前まで命を失えば、リーゼの心は自責の念で更に引き裂かれる」
「自分が・・・・・死ぬと言いますか」
「納得いかないのだな」
「ジジ・フラグに会ってみろ。　会えば分かる」
父はそう言うと居間から出て行った。
　地上人がどのようなものか見てやろう。
胸中はその思いで占められていた。

#5

ムートン市の軍営のガレージに6機の魔装機兵ガディフォールが搬入されていた。
その内1機の機体色は黒、外装は猛禽類を連想させたものから、突起や装飾を減らした鎧に変更されていた。
黒いガディフォールは排除すれば機体性能を著しく損ねるパーツのみ残され、新たな装甲を付けた。
その姿から元の機体を連想することは難しくなっている。
カインは自分の搭乗機である黒いガディフォール［ガディフォール・レイ］の足元で、この機体の設計者であり、この国の王女であるラン・アーヴィンに敬礼した。
ランも敬礼を返す。
「操作感はどうですか」
ランが唐突に切り出してきた。
この人はいつもこんな感じだ。
自分の好奇心を優先するだけに邪念が無く、軍人にありがちなスレた所が無い。
「オリジナルより重いですが、装甲が厚くなった分被弾を気にしなくていいです」
「やっぱり重いのですね」
ランは三つ編みを弄りながら思案していた。
「機体重量の増加よりも、外装を変更したことによる精霊象徴の加護を失った事が影響していると思います」
「姿を変える事で術式を変更していますから。今のセッティングではガディフォールでは無い気がします」
「総合的にはオリジナルより遣い易いと思います。　原機の想定している高機動戦闘に対して武装のレイアウト（配置）に難がありましたから。　そこを改善していただいただけでも戦

闘力は向上していると思います」
神聖ラングラン王国で設計されたガディフォールは、正魔装機兵ソルガディの機能の多くを簡略化したため、武装と機体性能の相性が非常に悪い。
その原因は劣悪な操作性と薄い装甲、加えて攻撃力不足が挙げられる。
特に高速戦闘時に使用できる武装は両翼のビームキャノン2門だけであり、威力の低さもさることながら、推進装置に直結しているため、機動によって射角が制限される。
最も致命的なのが、高速戦闘時に使用される精密射撃のプログラムの精度があまりに低い事だ。
　そこでランが行った改修は、装甲強化と武装の配置変更である。
装甲が大量に追加され、重量が増加したことにより運動性は低下したが、元々C級魔装機兵とはいえ抜群の運動性を

持っていたため問題は無かった。
両翼のビームキャノンは両腕に配置され、通常の射撃から、出力を制御したビームサーベルにまで使うことができる。
「ガディフォールの高速移動によるヒット・アンド・アウェイという戦術思想は有効であると思いますが、一人の兵士に要求される技量がネックです。　現実的にオリジナルを使いこなせる兵士がラ・ギアスに何人居るでしょうか？」
「まだ、ラ・ギアス人には過ぎた機体ということですか」
　地上人ならばどうなのか。
言葉になりそうな発言を飲み込む。
「姫様のブローウェルを操縦者が決まりましたか」
「どうしました突然」
「改修が進んでいるのが見て取れますので」
「最近召還された地上人の助言ですよ」
「エーテルジェットスラスターを増設して、両肩の砲を外しました」

「砲を？」
「代わりに大型ミサイルコンテナを二つ背負います」
「考えられているものだ。　この機体の問題点であった機体重量と運動性を単純な方法で解決するとは・・・・しか
し改修もガディフォールはバゴニアとの開戦に間に合いますが、他の機体まで考えると」
「そんな弱気では地上人のジジ・フラグに怒られますよ」
「姫様は気に入っておられるのですか？」
「はい。　でも最近は恐くて嫌いです」
「何故？」
ランが暗い視線をガレージの外を走る少女へ向ける。
リーゼロッテ・ターナーが人一人分はありそうな背嚢を背負って走っていた。
「あの方は・・・・」
「知っていますか」
「リーゼロッテ・ターナー」
「指導だと分かっていても、あの人が打たれたり投げられたりするのを見るのは・・・・嫌いです」
「まさか」
「気を失っても、蘇生させて何度も調練を繰り返されるのですよ」
「止める者は」
「居ましたよ。　全員やられちゃいましたけど」
ランが首をすくめる。
「強いのですね」
「戦いになると手が付けられません。　虎に人が挑んでいるようなものです」
「それほど強い男がなぜ、リーゼを痛めつけるのですか？」
「『ジジ・フラグの従者が弱くてはいけない』というのが彼の弁で、輪をかけるようにリーゼロッテが、『ジジ・フ

ラグを信じています』の一点張りです。　そんな二人ですから調練の厳しさが度を越していくのです」
「・・・・壮絶としか言いようがありません。　あのリーゼが闘っているというだけで、私には信じられない」
カインは外で走るリーゼロッテを見つめた。
淀みなく、一定の動作で走る彼女がひどく歪に見えた。

#6

ガレージの外、整地されていない草むらに一人の男が立っていた。
体が大きく、眼光の鋭い男だった。
ラン王女に特徴を聞いていたのでその男が、ジジ・フラグという地上人だと分かった。
「カイン・カーワンと申します」
「ジジ・フラグだ。　ランからお前のような男が来ると連絡を貰った」
互いに敬礼を交わす。
ジジの敬礼は穏やかで、敵意は無いように思えた。
「少し話をよろしいですか」
「聞くよ。　大体見当は付くが」
「リーゼロッテ・ターナー殿の事です」
「知らないな。　そんな人間は」
カインの心臓が大きく脈打った。
かっと血が熱く滾るようだった。
体の内に発する熱気を抑え、平静を装ったまま話を続ける。
「あなたの従者です」
「あれはシャルロット・フラグだ。　国王様から従僕として下賜された」
「・・・・従僕」
噛み締めるように呟いた。
ジジ・フラグの返答は現実を告げているだけだった。
その過酷な現実を当人に聞くまで受け入れていなかったのだ。
「文句があるか」
ジジ・フラグが抑揚の無い声で言う。
リーゼロッテを物の様に扱うこの男が許せなかった。
頭の中ではラン王女が言う、リーゼロッテがこの男に殴られてい

るという言葉が何度も反響していた。
「地上人のあなたには分からないだろうが、リーゼの生家のターナー家はこのサザ公国建国の功臣の一族だ。　この国の人間にとってそれは大きな意味を持っている。　それをあなたは辱めているのだぞ」
ジジの表情は冷静そのものだった。
今まで遠くを見ていた視線が自分に向けられた。
「ふむ。　そういうことか」
「何に納得しているのか」
「言えないな」
「貴様！」
「この事件は無視しろ」
頭に血が上っていたが、この男が父と同じ事を言っていることは分かった。
「無視できないから、こうしている」
「真実を知ったところで、到達するのは落胆だけだ」
「・・・・・謎掛けはやめてくれ。　血の上った頭では腹が立つだけだ。　真実とやらを知っているのか？」
「功臣の一族が抹殺され、その生き残りの少女が、地上人の従僕として下賜される。　これが普通にあり得る事かよ」
「ない・・・な」
「あり得ない事を動かす力学が働いている。　ということだ」
今の言葉で激しい怒りに熱せられていた理性が急速に冷めていく。
遠まわしに言っているが、その力学が政府や王家を想像させる事は十分だった。
「俺も推測でしかないのだ。　早とちりをするな。　事件の時期をバゴニアとの開戦間近に重ねてきた事も考えろ」
「・・・・・」
息を呑んでしまった。
この地上人はリーゼロッテの生家「ターナー」家が、サザ公国の海

防に影響を与える力を持っている事を知っているのだろうか。
もしもターナー家が国家に裏切られていた場合は、同族の領主が黙っていはいない。
サザ公国の生命線の海側から叛乱、これは国家存亡の危機だ。
自分の頬に触れると冷たく、血の気が引いていた。
「いいか。　お前の頭に渦巻いた想像を決して口外してはいけない。軍人をやっていけなくなるぞ。　今は余りにも唐突な事で、頭に血が上っているだけだ。　わかるな」
無言で頷いた。
口を開けば、ジジに真実を問いただしてしまいそうだった。
「お前・・・・シャルロットのために全てをなげうって、闘うか」
「あなたはどうなのだ」
「闘う」
ジジが断言した。
力みやけれんなど感じなかった。
「・・・・分からないな。　縁や縁の無い少女のためになぜそこまで配慮するのか」
「優男なら抱きしめて慰めてやるだろうが、俺は戦人だからな。そんな優しさで怒りを誤魔化すことはできない。

闘うことでしか無念を晴らさせてやることが出来ない」
「・・・・できますか」
「ふふふ」
ジジが愉快そうに笑う。
不謹慎だと分かっていたが、これから始まる戦いを期待するような表情に、僅かな羨望を抱いてしまった。
「仇討ちができたら痛快だとは思わないか」
「誰に刃を向ける気なのだ。　それは叛乱と呼べるものかもしれない」
「そこに義が立っていても、叛乱と呼べるのか？　お前はどう思っ

ている」
「自分は軍人だ。　このサザ公国の軍人であるかぎり、国家と王家に仇なす者は敵だ」
「人間としてはどう思うのだ。　幸せに暮らす一家を利己の嫉妬で抹殺するような者に義が在ると思うのか？」
「大義は国家が決める事だ。　軍人は国家に忠節を尽くせばいいのだ」
「軍人という考え方に逃げるな！」
雷鳴が落ちるような大喝だった。
向き合ったジジ・フラグの瞳が燃えていた。
「自分が逃げていると」
「違うのか。　お前は軍人である誇りを言い訳に困難から逃避している。　それは男として恥ずべきことだ」
違う。　言おうとした唇が硬直した。
体が震えた。
自分は愚痴をこぼすだけで、一度として本当の困難に立ち向かおうとすら考えなかった。
誰にでも乗り越えられる試練だけを選んで生きていたのではないのか？
今まで自分は取るに足らない成功と官位を恃みにしていたのだ。
ジジ・フラグの指摘にはまるで返す言葉が無かった。
この男は敵地に等しい場所で、リーゼロッテを守っているのだ。
「お前の信念など、哀れな少女一人救うことが出来ない。　お前を含めて俺に挑んできた者たちは浅はかなんだよ。
シャルロットの問題は俺を殺せば全てが円満に解決するほど単純ではないんだ」
「・・・・言葉も無い。　何も出来ない自分に怒りしか湧かない・・・・」
「怒りを抱きながら、その怒りがいったい何なのか見つめてみろ。

苦痛と悲しみに塗れながら生きることになるだ
ろうがな」
「あなたはそうなのか」
「俺だけではない。　男とはそういうものだ」
「すごいな・・・・あなたは。　ただの地上人ではないのだな」
「事も無げに生きてると思うなよ。　元同僚が将軍になっていると
いう噂を聞くだけで、心の中がかきむしられる様になる。　ジジ・
フラグはそんな浅ましさを持っているのだ」

汗に塗れたリーゼロッテが立ち止まる。
「・・・・・カイン殿」
　リーゼロッテに表情は無い。
胸だけがふいごの様に胸が大きく動いている。
「シャルロット殿・・・・で、よろしいか」
シャルロットが頷く。
何か言葉をかけたかった。
シャルロットの瞳には強く鈍い輝きがあった。
無表情な仮面の下には強固な意志がある。
「兵は」
優しい言葉など思いつく訳も無い。
シャルロットは一人の戦士であることを選んでいるのだ。
「兵は走れなければ務まらない。　ジジ・フラグ殿のやらせている
事は無茶に思えますが、間違ってはいない」
「はい。　私はジジ・フラグ殿を信じています」
「それがよろしい。　主従とは互いに信が無ければいけないのだか
ら」
「私は調練に戻ります」
駆けていく背中を見つめる。

君はどこへ走って行くのか。
戦いの果てには何の功名も無く、滅びが待つだけだ。
「・・・・・」
頬が濡れていた。
止め処なく涙が溢れる。
「当たり前の幸福に背を向けて生きる事を選ばれたのか」
ジジ・フラグが目を閉じる。
この男にも忸怩たる思いがある。
その思いを捻じ伏せ、シャルロットを鍛えているのだ。
「選ぶ事すら出来ない。　１５歳の少女がそれでも今の道を選んだのだ」
頷いた。
涙は止まっている。

#0__この章のさいごに（機体解説）

劇中でサザ公国の機兵の顔ぶれが多国籍です。
ブローウェル、ガディフォール（ラングラン王国）
ギルドーラＩＩ（シュテドニアス連邦）
保有台数は明記していませんが全て輸入したものです。
ちなみに国産の機兵は
グラフドローン、ルジャノール改
以上の２機種です。
ちなみにバゴニア連邦とは戦争状態にあるので、バゴニア製の機兵は導入されていません。
なぜＣ級以上の魔装機兵が国産されていないかというと、２点の問題があるからです。
第一に精霊契約の魔術師が在籍していない。
第二に高出力リアクターを生産できる工場が無い。
最も致命的なのが第一点で、この問題がクリアされない限りＣ級魔装機兵が生産できません。
そのため海洋国家であるサザ公国は他国から機兵を輸入しているのです。
（ラングラン王国やシュテドニアス連邦も代理戦争として戦力を提供し、戦闘データを回収している）

ガディフォールに関しては、ひどいこき下ろされ様で、武装レイアウトから戦術思想まで否定された上で改造されています。
重装甲化とか設計思想に反しまくってます。
可変翼にビームガンを設置するとか・・・・・狂気の沙汰だと思う。
高機動時の射角の制限は致命的な欠陥だと思う。

原作でも不遇なのだが、（装甲が薄いのに）足を止めて撃ちあったり、（運動性が高いのに）接近戦が苦手だし、ラングラン兵の能力が低すぎて、ヒット・アンド・アウェイの戦術そのものができなかったりします。
身の丈に合わない兵器そのものです。
ＭＳ系の名あり敵パイロットが搭乗していれば、それこそ鬼の様な性能だったろうに・・・・・・
味方で登場するのが、ザッシュ（ＥＸ）、テリウス（ＥＸ）では強さをまるで実感できませんね。

ブローウェルは準国産とも呼べる仕様なのです。
できるだけ劇中はオリジナル魔装機のディアブロに性能が肉薄するように扱っています。
足の遅い機体なのですが、ディアブロ譲りのウェイトバランスの良さが継承されており、砲を排除すれば接近戦にも強いです。
厚遇していますが、カスタム化への説得力と思っていただきたいです。
ちなみにブローウェル・カスタムの性能の悪魔さはＳＲＷ史の中でも伝説です。
すごく・・・・・（性能が）ヴァルシオンです。

ギルドーラ系に関しては輸出に際し、性能の安定化を図るために出力を下げた仕様になっています。
性能とか生産性とか無視しているシュテドニアス製の中で数少ない堅実な機体です。
サザ公国は水系と相性のよい操縦者が多いので、性能の低下は問題ないです。

ディアブロと同様にウェイトバランスに優れ、体術に秀でた操縦者には評判が良いです。
シュテドニアス製で代表格といえばバフォームとダイオンが挙げられますが、重機兵に分類されるこの二機は攻撃力が高い反面、壊滅的なウェイトバランスのためホバーやエーテルジェットで補助しないと陸上歩行が出来ない。
そのため小回りが利かずデリケートな任務に向かない。（その欠点をシュテドニアスは物量（総合火力）で補っている。）
そんな理由で輸入には至っていません。

#0―この章のはじめに

あらすじ（2）

地上世界の戦士ジジ・フラグはひょんなことからシャルロット・フラグ（リーゼロッテ・ターナー）を従者として受け入れる事となる。

彼女の事情を知った時事は彼女を弟子にして仇討ちのための調練を課す。

しかしそれは事件に大きく介入する事となり、刺客団を差し向けられる。

死闘の末、刺客を葬るのだが、これからジジとシャルロットは暗殺者に狙われ続ける事となった。

暗殺者を退けながら、ジジはシャルロットに調練を課す。

常軌を逸した激しさに、彼女の身の上を知る兵士の反感から諍いが続いた。

ガワンの息子カインも憤慨する一人であったが、事情を知るにつれ事態の深刻さを理解する。

黙々と走るシャルロットの姿に、男たちは忸怩たる思いを隠せなかった。

■この章の登場人物■

ジジ・フラグ

地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。

ラ・ギアス側の召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。

＞i２９９６７―３８５１＜

シャルロット・フラグ

サザ公国の建国功臣の末裔。謀略により家族を抹殺される。
ジジ・フラグに従者として下賜され、今は弟子となっている。
＞i２９９７０＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞３８５１＜
呉業＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞ご＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞ぎょう＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞
火星・移民軍の総帥。　地球連邦政府による弾圧に対する報復として小惑星を地球に落下させる任務を帯びる。
ジジ・フラグの義父。

カミュ・神原
地上世界では有名な科学者。ＰＴ開発を黎明期から携わり、果ては個人でＰＴの密造密売を行っている。

サーヴァ・ペネリウス
古代ラ・ギアスの著名な魔術師。現代では神格化されている。
現在は幽霊として存在し、ジジ・フラグなどを召喚する。

ゾナン・フィート
サザ公国の宰相。　以前のガワンの上司に当たる。

#1

ゾナン・フィートは眉間を揉みながら目を閉じた。
摂政の居室には自分が一人居るだけだった。
膨大な報告書に目を通し、一つ一つの情報を整理していく。
この一ヶ月の間にサザ公国とバゴニア連邦の軍事的緊張は一気に加速していた。
バゴニアの行う離間の策によりナンド、フド、バナンの三州の動向がかなり不透明になった。
王妃が行ったであろうターナー家に対する粛清は三州の領主それぞれに密告された事は間違い無い。
開戦を控えた状況にありながら州軍の抱える海軍の動きは鈍かった。
王室に対する不信から生まれた抵抗ではあるが、王妃が粛清を行ったという証拠は挙がっていないので、明確な叛乱には至っていない。
もしも三州の叛乱が起きれば、国境と海岸線で軍を挟まれる事となる。
そうなれば、海側に退いて各島の砦に立てこもりながらのゲリラ戦は不可能となる。
瞑目する。
閉じた目蓋の裏で光の残像が動きながら自分を包んでいく。
疲労した頭脳が冷却され、思考が冴える。
しかしそれは疲労で埋没させていた心の棘をはっきりと感じさせた。
まさかターナー家を使ってサザ公国の分断を行おうとは予想外だった。
中興の臣として知られるブエフ・ターナーは海軍の近代化に尽力した事と国内から有能な人材を多く集めた事で知られている。
特に海軍の近代化は彼無くしては在り得なかったと言える。
私財をなげうって軍艦や機装兵を購い、シュテドニアス連合から有能な将軍を招聘した。

結果として海軍の近代化は順調に進み、バゴニア連邦との戦争でも領土を防衛する事ができたのだ。
ターナ家とその類縁は国家に対する忠誠が厚い、しかし重大な裏切りの後ではその忠誠が憎悪へと変貌してしまうことは想像に難しくなかった。
　王妃の処断、それは効果的に行わなければならない。
しかし今の様な王家と地方が相反している状況では、王妃の処断は二つの勢力を完全に分断しかねない。
今のところ王命を用いた処断は勝算無き賭けでしかないのだ。
　誰かあの王妃を斬ってくれないものか。
ぐるぐると思考が回る。
　一人だけ思い当たる人物が居た。
地上人ジジ・フラグである。
この男はガワン・カーワンからターナー家の遺児リーゼロッテを匿っている。
ガワンの言ではリーゼロッテに尋常ならざる修行を課している。
何のために。　との問いには答えなかった。
それは王家への忠誠が答えを阻んだのだろう。
想像に難しくない事である。
リーゼロッテに仇を討たせるつもりなのだ。
　しかし、何のためであろうか。
王家に恨みを持たないこの男がなぜ仇討ちに助力するのか。
無知ゆえの蛮勇ではない。
この男を分析していけば、この世界に召還され、行った戦闘の全てに冷静な思考と迅速な状況判断が見える。
それに圧倒的な戦闘力が加味されているのだ。
ジジ・フラグという男は蛮勇という言葉では片付けられない才気を持っている。
一軍の将たる資質が在るはずの男が地上では傭兵として世界を浪々としていた。

それは不思議である。
浪々としてきた１０年の軍歴の中に仕官の誘いはあったはずだ。
ガワン曰く
「彼が仕官出来なかった理由は祖国を持たなかった事が大きい。
まず土地や物質に執着せず、人との関わりに重きを置いている。
それは人として大きな美徳ではあるが、それが過ぎれば身を滅ぼす毒となり得る」
思考の中のガワンの言は更に続く。
「祖国を持てなかった事は彼が戦災孤児だった事と少年兵として育てられた事が関わっている。　彼には拾われる以前の記憶が無い。
　それ故彼の記憶の始点は兵士として始まっている。　繰り返す流血の日々と移動が日常では故郷を持てるはずも無く、それが彼にとっての正常になっていたのだ」
「つまり我々のように帰るべき場所を守る者とは心情が違う。　言ってみれば平和な世界を殺戮で創り出すことができても、平和の只中には居場所を持てない。　だから新しい戦場を求める」
「あの男は世界の生み出した闇そのものです。　その黒さが漆のように澱みなく澄んだものだから、誰もが惹かれるのですが、本質は邪悪そのものです」
まるで友を語るかのような口上だった。
ガワン曰く
「百年の知己を得たようなものです。　それゆえあんな男が一人世の中にのさばって生きても良いのではないかと愚考したりもします」
　行動理念こそ歪ではあるもののガワンからは不世出の傑物と評され、慕われているのだ。
加えて今まで喧嘩騒動を起こした兵には反発されながらも実力を認められ支持され始めている。
根が古風な武人なので兵士には好かれるようだ。
　この男に会ってみようと思えた。

#2

慎ましい佇まいの屋敷だった。
一家が住めば手狭になるような家にジジ・フラグは住んでいる。
従者が訪いを言うが玄関からは人の気配は無い。
玄関を右に回った庭から尋常ではない気配がしている。
土を踏む音と何かを叩きつける音が数度あった。
稽古なのだろう、しかしまるで気合が聞こえない。
「訪いに気付いてはいないのだ、庭へ行こう」
従者に告げる。
　男女が４メートル程の間合いで立っている。
ジジ・フラグとリーゼロッテである。
得物は剣だった。
二人の発する気配は仕合そのもので、リーゼロッテには背後に立つ私達の姿に気付かなかった。
両者の間合いがじりじりと詰まる。
ジジ・フラグの握る得物は細い竹の棒であったが、真剣を持つリーゼロッテを押していた。
今のリーゼロッテは目の前の竹の棒が魔剣や妖刀の類に見えているのだろう。
ジジ・フラグが無造作な構えから青眼へ構えを移す。
　まるで圧力が違う。
踏み込んだ剣戟があらゆる動作に変幻するのがこの構えの持つ強みである。
ましてこの両者ほど実力が開いていれば、リーゼロッテに次手を予想することは困難である。
リーゼロッテは動かない。
圧倒する気を当てられながら、無為の一撃を止めている。
　これは修行なのか。

お互いが必殺の気をぶつけながら対峙している、これは既に死合いへとなっているのではないか。
リーゼロッテの気配から動揺が消失していく。
変幻に対応するのではなく、己の最も信頼する技を遣う方針へ転換したようだ。
無謀ではあるが、剣からは迷いが消える。
リーゼロッテの腰が僅かに低くなる。
重ねるようにジジ・フラグの姿勢がわずかに低くなる。
ジジ・フラグの右足が地を爆ぜるように蹴った。
そう見えた。
右足は地に据えられたままだった。
今の偽装に乗せられたリーゼロッテが突きを放つが、動きに呼応していない刺突は隙だらけだった。
ジジ・フラグが僅かに動き、小手で剣を弾き、流れる動作で左肩を突いた。
そのまま竹の棒で押し倒し、鳩尾に拳が当てられる。
絶息したリーゼロッテは気絶した。
　ジジ・フラグはリーゼロッテの体を引き起こし、背中を押すとリーゼロッテが蘇生する。
呼吸は荒い。
「見事である」
そう言うとジジ・フラグが会釈をした。
眼光はまだ鋭さを失っていなかった。

　ゾナンはジジフラグの書斎に通された。
客間や居間は刺客との戦闘で破壊され、ここの住人は比較的無事な部屋を使っているようだった。
ジジ・フラグの書斎は実に雑然とした様子だった。

史書や技術書が乱雑に置かれ、所々に付箋が付けられている。
子供の読むような絵本や、著名な詩集は手の届きやすい机に置かれている。
「……どうぞ」
シャルロットが二人分の茶を配膳する。
会釈をした時に、彼女の黒髪が揺れた。
ゾナンは彼女の母の面影に懐かしさを感じた。
「王城で顔を見て以来であるな」
ゾナンは改めて椅子に座りなおし、体をジジに向ける。
「宰相閣下で、よろしいので」
「ここは王城ではない。　くだけた言葉で喋っても構わぬ。　使者も立てずに訪れたのは私なのだから」
「助かります。　宰相の御用は？　地上人見物だけではないでしょう」
「うむ。　単刀直入に申す。　私はバゴニアとの開戦を遅らせたいと思っている。　何か妙案は無いか」
ジジが声を抑えたように笑う。
「可笑しい事を尋ねる。　地上人の俺に献策を求めるのですか？　それこそ王城では賢者達が策をたてているのでしょう」
「無い。　今回のバゴニアは必勝を期して開戦を迎えようとしている。　強行にでも宣戦布告するつもりだ」
「受けて立てばよろしい。　武門とは戦う事を宿命されている」
「その通りだ」
ジジの態度は至って柔らかい。
召喚されたばかりのころに見せた鋭利な側面は表に出ていなかった。
だがそれは拒絶の意思を暗に示していることだと感じられた。
「しかし、恥ずかしながら、自軍の対立をまとめきれていない現状では、国は滅んでしまう」
「民は生き残ります。　今が国の命日と思い諦めてください」
「お主の言う事は最もである。　開戦を控えこの体たらくでは、国

家の命数も尽きたかに思える。　しかし私はこの国の宰相である。
　国家を存続させるためには全てを尽くさねばならない」
「では尽くすが良いでしょう」
「お主も知っているであろう」
「何を？」
「ターナー家の事だ」
「知っていますね。　風聞に聞く程度には」
「私見を述べて構わぬ」
「では」
ジジが一息に茶を飲み込む。
「このターナー一族の至誠と自己犠牲が無ければ今の国家は無かったというのに、ターナー家は俺の知る限り最も残酷な方法と軽薄な動機によって滅ぼされた。　この事がターナー家の親類である三州公に不信を抱かせるのは必然だったと思う。　今にして思えば、この国の良心とも言うべきものはターナー家の姿勢や規範そのものだった。　たいした理由も無く一族を滅ぼした王家が悪の巣窟に見えても無理からぬ事。　つまり身から出た錆だ」
「全く、その通り」
やはりこの男は王府と海側の地方州の関係の悪さまで感づいていた。防衛上の拠点や港を有するこの三州は、この国の最後の防衛線であり、事実王城を陥落された際もゲリラ海戦で戦況を打開してきた史実が多くある。
現在の三州の対立とは裏腹に、防衛上の重要性はまるで変わっていないのだ。
「だが、何もかも遅い。　バゴニアが裏で糸を引いたであろうこの離間の策は成ったのだ。　事件の首魁を斬って国内の意思をまとめるまで開戦は待たれないだろう」
「お主もバゴニアの仕掛けた離間と読むか」
「古代から男女の嫉妬を使った離間は多い。　証拠は無いが、今回はその典型的なものだ。」

#3

シャルロットが二人の空いたカップに茶を注ぐ。
ささやかな湯気が二人の会話を阻んだ。
「俺は近年の戦史を読んだだけだが、バゴニアは陸軍こそ精強だが、海軍は惰弱だ。　それゆえ精強な海軍を持つサザ公国は地形を利用して今日まで撃退してきた。　海軍同士の戦いでは勝負にならないからこそ戦力を分断する策を採ったのだ。　この離間を男女の情に隠して行ってきた相手は相当の手練といえる」
「手練？」
「名人芸とも言える。　この離間の発起人は事件の下手人の背中を押し、子飼いの暗殺集団を斡旋しただけだ。　半端な知恵者ほど手数多く策を積むのだが、下手人が事件の証拠を秘匿することすら見通していたのだろう」
「その通りだ」
「しかし。　一つだけ解せない事がある。　中世以降の民族間の対立からこの戦は続いているのだが、バゴニアがサザ公国の様な小国を落す事にどれほどの意味があるのか。　この国の海軍を手に入れて軍を増強するにしても、あまりにも強引なやり方だ」
「王家の保有している地上世界とのゲートが狙いなのだ。　バゴニアは召還魔術師が数名居るだけで、地上とのゲートを所持していない。　地上との交易で機械技術の導入を考えているのだろう」
ゾナンは小国という指摘に憤慨を覚えたが、ジジの指摘は正しかった。
「いまいちゲートという解釈が分からないな」
「この世界と地上との接点といわれるものがゲートだ。自然発生するものから、魔力をキーにする魔法陣ものなどさまざまな物がある。
　この国の所持しているゲートは王以前のアーヴィン家で管理されていたものなのだ。　ゲートそのものは当代宗主から次代宗主への

口伝のみと言われ、全くの秘密といっていい」
「その秘事が失われている事は考えられないか？」
「無い。　アーヴィン家は元々この地方の神官で血筋のはっきりした家なのだ、家督継承には厳しい掟が設けられ、相続が滞った事は４００年の間で2度といわれている」
「奪取可能なゲートの中では手軽ということか」
「私達にはその規模や形すら分からないのだがな」
「王家の所持するゲートの争奪戦を軸に事件が続いている事だったのか……」
二人は一息ついて茶を呷った。
ジジが二、三度頷き、喋り始める。
「宰相は開戦を遅らせて欲しいと言ったが、俺からすれば無意味な策に思える」
ゾナンは無言で聞く、
「少数精鋭で補給拠点へ奇襲」
開戦を止めるという次元の話ではなくなっていた。
侵攻軍の急所である補給線を叩いてしまうということだった。
「・・・・聞こう。　まず空軍の迎撃をどうする」
「問題ない。　ガワンから見せてもらった偵察機の映像から判断すれば、空をただ飛ぶだけの技術しかない相手なら、倒すことも振り切る事もたやすい」
「手厳しい、ただ飛んでいるだけにしか見えないというのは」
「あくまで私見であるのだが、この世界の人間はまだ魔装機兵というものを戦車や戦闘ヘリのような便利なツールの延長だと考えていると思う。　俺は違う機兵とはツールでも人間の延長でもない。人と似て非なる強靭な体なのだ。人間が人間時代に培った学問で作られた戦闘技術が基本の相手は俺の敵ではない。　はっきり言えば、ラ・ギアスの機兵運用思想は地上人からすれば古すぎる。　俺達の世界は人間時代の戦術継承から強力な個性による突破に時代が移っている。」

「そこまではっきり断言できるのか」
ジジが頷く。
この男が戦闘に対して幻想を抱いている事は考えられない、事実を繋ぎ合わせて分析した解なのだろう。
「しかるべき武装さえあれば連隊規模の戦力を行動不能にすることができる」
「一機で」
「最低でも手練の４機」
「…生還を考えられない」
「だからこそ拠点への奇襲を献策したい」
「分からないな。　ジジ・フラグがこの国に好意を抱いているとは思えない」
「俺に張り付いている監視の目を全て外したいのさ」
「何故？」
ゾナンは僅かに胸の動悸が早まっている事に気付いた。
この男の目的は知っている。
それを今ここで、宰相である自分に言えるのか。
「王妃をシャルロットが斬るため」
背後のシャルロットが僅かに動く。
彼女の僅かに乱れた呼吸が聞える。
「お主ならば容易いはずだ。　なぜ回りくどいやり方をするのか」
「俺は助っ人に過ぎない。　露払いまでしてやっても、仇討ちは本人がやるべきだ」
「それは道理でしかない。　王妃を討つ前に死ぬ事もあり得る」
「私はターナー家の最後の末裔として戦います。　それはジジ・フラグ殿の指し示した道なのです」
「助太刀が仇討ちの作法に背くとでも思っているのか？」
「生き残った者の務めです。　私はターナーの末裔としての誇りを捨ててまで仇討ちを代行してもらうつもりはありません」
「戦いが終わった後のことを考えたことはあるのか」

「私はジジ・フラグ殿の従者です。　今も……そしてこれからも」
シャルロットの硬直していた表情が緩み、わずかに視線が泳いだ。
「…そうか」
彼女はジジの生き方を模倣し、戦士として生きる事で、正常な理性を繋ぎとめているのだろう。
ただの少女が青春を捨てただけなのだ。
ジジは腕を組んだまま瞳を閉じている。
この男にもただの少女に苛烈な生き方を強いる事に忸怩たる思いはあるのだ。
仇討ちを本人にやらせるような倫理観を持つ男なのだから。
ゾナンは頷く。
「お主の拠点奇襲の献策は受けよう。　必要な資材はラン様を通して集めるが良い」
「機が来れば仕掛ける。　それは了承してくれるか」
「了承も何も、お主程の力があれば、我が軍の包囲網は抜けられるだろう。　死者を出さなければそれでいい」
ゾナンが立ち上がる。
ジジに背を向けたまま喋る。
「仮に、リーゼが仇討ちを果たしたとする……、その後は如何する」
「ジジ・フラグはいつも変わらない。　ただ戦うだけだ」
「何のために？」
「戦いしか知らん。　だがなこんな男が生きていく隙間くらい世界にはあるんだよ」
「そうか」
どうしようもない生き方だ。
この男は自分から破滅へ向かっている。
ゾナンは沈痛な面持ちのまま館を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9537v/

スーパーロボット大戦ＡＢｓ・ＯＧサーガ

2011年10月13日12時52分発行